史跡富田城跡発掘調査報告書

（千畳平地区）

附．日向丸城砦跡群発掘調査報告

2004年３月

広瀬町教育委員会

史跡富田城跡発掘調査報告書

（千畳平地区）

附．日向丸城砦跡群発掘調査報告

2004年３月

広瀬町教育委員会

序

広瀬町は、かつて戦国時代の雄、尼子氏の本拠地として知られ、その後毛利氏、堀尾氏の治世を経て、江戸時代には松平家の支藩である広瀬藩３万石の城下として栄えた地域です。中でも中世における支配の拠点である富田城跡は中国地方を代表する城館遺跡として広く知られており、昭和９年には国の史跡に指定されました。

この富田城跡の最北端に位置する曲輪である千畳平は、古くから「桜の名所太鼓壇公園」として多くの方に親しまれてきましたが、ここに設置しております便益施設が長い年月を経て老朽化し、来訪者より再整備の要望が強まったため新築することになりました。このため建設予定地の発掘調査を行ったところ、通路跡を始めとする多くの遺構を確認しました。

一方、塩谷地区では、日向丸という月山に隣接する著名な城砦跡の存在が知られていましたが、林道建設計画に伴い事前の発掘調査を行ったところ、その構造の一端を解明することが出来ました。

この度、これら２つの遺跡について報告書を刊行する運びとなりました。さらに、今後も多方面から調査・研究し、郷土が誇れる文化財として、また、身近な歴史教育の場として整備・活用に努めて参りたいと考えております。

終わりになりましたが、発掘調査にあたりご指導頂きました文化庁・島根県教育委員会をはじめとする関係各機関、史跡富田城跡総合整備委員会、発掘調査及び整備工事に従事していただきました方々に、厚くお礼を申し上げると共に、本書が地域の歴史解明に役立つことを念願致しております。

2004年３月

広瀬町教育委員会
教育長　村　上　晴　夫

例　　言

1．本書は平成13年度に実施した便益施設建設に伴う史跡富田城跡千畳平地区及び、平成11年度に実施した林道塩谷線建設工事に伴う日向丸城砦跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、広瀬町教育委員会が実施した。

3．調査組織は以下の通りである。

平成13年度　史跡富田城跡千畳平地区

［史跡富田城跡総合整備委員会］

藤岡大拙　（島根県立女子短期大学学長）
井上寛司　（大阪工業大学教授）
河瀬正利　（広島大学教授）
小野正敏　（国立歴史民俗博物館助教授）
五味盛重　（建造物保存技術協会参与）
山根正明　（松江南高等学校教諭）
宇山辰夫　（広瀬町役場助役）
村上晴夫　（広瀬町教育委員会教育長）
釈臣正見　（広瀬町文化財専門委員）
足立武夫　（広瀬町文化財専門委員）
山崎享二　（出雲尼子を興す会会長）
松崎美弥子（出雲尼子を興す会副会長）
金子義明　（広瀬町立歴史民俗資料館嘱託員）

［調査主体者］　広瀬町教育委員会　教育長　村上晴夫
［事　務　局］　加納　弘　（教育次長）
足達　修　（主査兼文化財係長）
石原秀樹　（文化財係主任）
［調査担当者］　舟木　聡　（文化財係主事）
［調査補助員］　金子義明　（広瀬町立歴史民俗資料館）、吉田　博（臨時職員）
［調査参加者］　岩田博道、岩田　隆、蒲生　盛、坂田真一、松坂唯男、松坂トモ子、山根広志

平成11年度　日向丸城砦跡群

［調査主体者］　広瀬町教育委員会　教育長　村上晴夫
［事　務　局］　楫野光範　（教育次長）
古山亮二　（補佐兼文化係長）
石原秀樹　（文化係主任）
［調査担当者］　舟木　聡　（文化係主事）
［調査補助員］　金子義明　（広瀬町立歴史民俗資料館）

［調査参加者］　岩田博道、田村弘之助、仙田茂道、祖田亮、近藤幸吉

平成15年度　報告書作成

［事　務　局］　村上晴夫　（教育長）
加納　弘　（教育次長）
内田雅巳　（文化財係長）
石原敬治　（文化財係主任）

［作成作業］　舟木　聡　（文化財係主任主事）
今岡利江　（臨時職員）
山本千草　（臨時職員）
西村千枝子（臨時職員）

4．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）
今岡　稔（島根県文化財保護指導委員）、足立克己（島根県教育委員会）、東森　晋（島根県埋蔵文化財調査センター）、東山信治（島根県埋蔵文化財調査センター）、佐野木信義（島根県埋蔵文化財調査センター）

5．富田城跡千畳平地区出土の製鉄関連遺物の鑑定及び記述にあたっては、穴澤義功氏（たたら研究会委員）のご指導・ご協力を得た。

6．本書に使用した第１図及び第20図は国土交通省国土地理院発行25000分の１のものを、他の富田城跡に関する地形測量図は株式会社ワールドに委託・作成したものを使用した。

7．本書に用いた略記号の内容は以下の通りである。
ＳＫ（土壙）、ＳＤ（溝状遺構）、Ｐ（柱穴）

8．本書に使用した実測図は以下の者が作成した。
（遺構実測）舟木、石原秀樹、金子、吉田
（遺物実測）今岡
（浄　　書）山本、今岡

9．本書に使用した遺構及び出土遺物の写真は以下の者が撮影した。
（遺構写真）舟木
（遺物写真）今岡

10．本書の編集・執筆は舟木、今岡が行った。

11．出土遺物及び本書に掲載した遺構・遺物の実測図及び写真は広瀬町教育委員会で保管している。

本　文　目　次

序　文

例　言

目　次

第Ⅰ章　位置と環境・・・

第８図　Ⅱ区遺構平面図・・・

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　周辺の城館遺跡

広瀬町は、中世末から近世初頭にかけて、出雲国内を始めとして、山陰・山陽支配の中心拠点となり、また、江戸時代には松江藩の支藩である広瀬藩三万石が置かれ、以後明治維新に至るまでその城下町として栄えた地域である。

このような歴史的背景から、この地域には中世～近世期の遺跡、特に城館遺跡が数多く存在する。（注１）

その多くは山城跡であり、あまり開発工事の及ばない山上に位置するため、遺構の保存状態は良好であるが、低丘陵上や平野部に位置するものについては後世に宅地や田畑として開発されたため、損壊または消滅しているものもある。

富田城跡は、標高約190mの月山山頂部を中心に、北へ向かって馬蹄形に伸びる丘陵部を含んだ、周囲約1.5km四方に及ぶ大規模な城砦である。

昭和９年に国の指定史跡となった後、昭和52年の石垣修理に伴う山中御殿平地区の発掘調査を皮切りに、以後史跡整備に伴い山頂及び山麓の曲輪群について発掘調査が行われて多数の遺構と遺物が発見されている。

富田城跡の北東新宮谷一帯には、尼子国久ら新宮党の居館跡である県史跡新宮党館跡を中心とした新宮谷城館跡群、そして南西の塩谷一帯には明星寺館跡を中心とした明星寺・塩谷城館跡群が存在し、これらについても数箇所で発掘調査が行われている。

月山北部山麓を流れる飯梨川（富田川）の河床には、城下町遺跡である富田川河床遺跡がある。寛文６年（1666）の大洪水によって水没し、以後幻の城下町と呼ばれてきたが、昭和40年代に上流にダムが建設されて以来、徐々に遺構が露出するようになった。

発掘調査は昭和49年の第一次調査を皮切りに数次にわたり行われ、数多くの遺構、遺物が発見され、国内の中・近世を代表する遺跡として知られるようになった。

日向丸城砦群は富田城跡の西側背後山上に所在し、富田城跡とは本丸西側曲輪群と細い尾根伝いにつながっている。最高所に存在する日向丸は伝承では尼子氏の朝拝所と伝わる。

京羅木山城砦跡群は広瀬町と東出雲町の境にまたがって存在する城砦群である。

天文12年（1543）周防の大内義隆が大軍を率いて富田城を攻撃した際に本陣が置かれたと伝わる城で、山頂部から尾根沿いに曲輪が連続している。特に東方尾根筋では枡形虎口と連続竪堀で防御を固めている。

勝山城跡は京羅木山城砦跡群の南東端に位置し、毛利氏による富田城攻略戦の際に最前線基地として使用されたと考えられている。城の構造として特徴的なのは、地元で「槍溝」と呼ばれる大規模な連続竪堀群と、「人枡」と呼ばれる中世では県下最大規模の枡形虎口の存在である。

土居城跡は真木氏の居城と伝わる城で、現在の宇波小学校裏山に存在する。山頂部に小規模な曲輪を階段状に一文字に配し、山腹には居館跡とみられる広大な曲輪が存在する。

明治30年頃、旧宇波小学校敷地造成中に完形の備前系陶器壺（間壁編年Ⅴ期）が１点出土している。（注２）（注３）

広瀬町内の城館遺跡は、富田城跡と富田川河床遺跡以外はほとんど考古学的調査が行われていない。しかし幾つかの遺跡については工事などに伴い調査が行われている。

福頼城跡（福頼遺跡）は伝承では福頼氏の居城と伝わる城跡で、飯梨川と山佐川の合流点に突き出た舌状丘陵先端に位置する。階段状に曲輪を配置し、尾根の背後を土塁と深い堀切で遮断している。昭和62年、福頼団地造成工事に伴い調査が行われ、建物跡とみられる柱穴などとともに、備前系陶器や青磁碗、白磁小坏、土器擂鉢、土鍋等が出土している。これらは概ね15世紀代のものと考えられることから、城の時期もこの頃を中心とするものと考えられる。（注４）

土居成遺跡は寺山城跡のある山から飯梨川へ向かって伸びる舌状丘陵上に所在する。この丘陵全体が統合中学校建設予定地となったため、平成14年度から町教委が発掘調査を行っている。

その結果二重の堀切で区画された内外から多数の柱穴や、礎石建物跡、土壙、溝などが発見され、中国製青磁、白磁、染付、南蛮系陶器や備前系陶器、瀬戸美濃天目茶碗、京都系の土師質土器等が出土している。

これら出土陶磁器の年代から15世紀初頭から16世紀中葉まで存続した城館跡と考えられ、背後の山上に存在する寺山城との関連も考えられる。（注５）

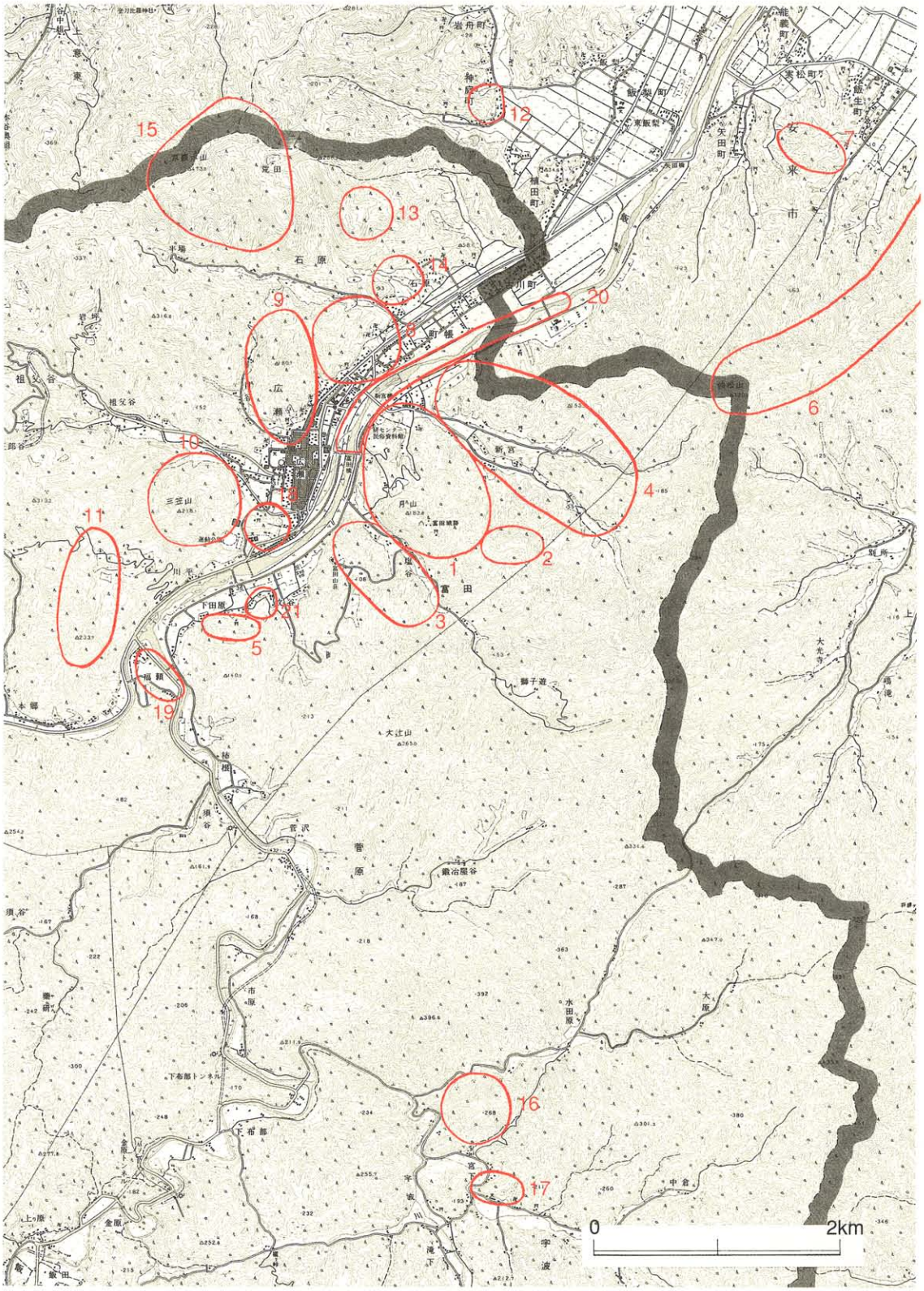
注１．　島根県教育委員会1998『出雲・隠岐の城館跡』

２．　広瀬町1968『広瀬町史上巻』では、「窯変須恵器」という呼称で紹介されており、現在も宇波小学校で保管されている。

３．　間壁忠彦1991『備前焼』（考古学ライブラリー60）ニューサイエンス社

４．　広瀬町教育委員会1987『福頼遺跡発掘調査概要』

５．　広瀬町教育委員会2003『土居成遺跡発掘調査現地説明会資料』



第１図　周辺の城館遺跡

表１　周辺の中世城館遺跡一覧

	名　　称	種　別	所　在　地	概　　要	備　　考
1	富田城跡	城館跡	広瀬町富田	曲輪、帯曲輪、土塁、石垣、堀切、虎口、陶磁器、瓦	国史跡 本報告書
2	日向丸城砦跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切	本報告書
3	明星寺・塩谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土塁、堀切	
4	新宮谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切、陶磁器他	県史跡新宮党館跡含む。
5	寺山城跡	城館跡	広瀬町菅原	曲輪、竪堀	蓮花寺山城
6	独松山城砦群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土塁、堀切、竪堀	
7	飯生山城跡	城館跡	安来市飯生町	曲輪、竪堀	
8	亀井ヶ成、誓願寺裏城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬、石原	曲輪、土塁、井戸	
9	大成山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土塁	
10	三笠山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、堀切	
11	経塚山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪	
12	神庭横山城跡	城館跡	安来市神庭町	曲輪	
13	勝山城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪、土塁、堀切、連続竪堀、枡形虎口	瀧山城
14	石原城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪	
15	京羅木山城砦跡群	城館跡	広瀬町石原	曲輪、連続竪堀、虎口、土塁、堀切	
16	高小屋城跡	城館跡	広瀬町宇波	曲輪、堀切	宇波城？
17	土居城跡	城館跡	広瀬町宇波	曲輪、陶磁器	削平等により一部損壊。宇波城？
18	勝日山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土塁、堀切、井戸	八幡山城、削平等により遺構一部損壊。
19	福頼城跡	城館跡	広瀬町下山佐	曲輪、土塁、堀切、柱穴、陶磁器他	消滅 Ｓ62年発掘調査。
20	富田川河床遺跡	集落跡	広瀬町富田～安来市古川町	城下町遺構、風呂遺構、陶磁器他	
21	土居成遺跡	城館跡	広瀬町富田	礎石建物、掘立柱建物、堀切、陶磁器他	Ｈ15年発掘調査。

史 跡 富 田 城 跡

（千畳平地区）

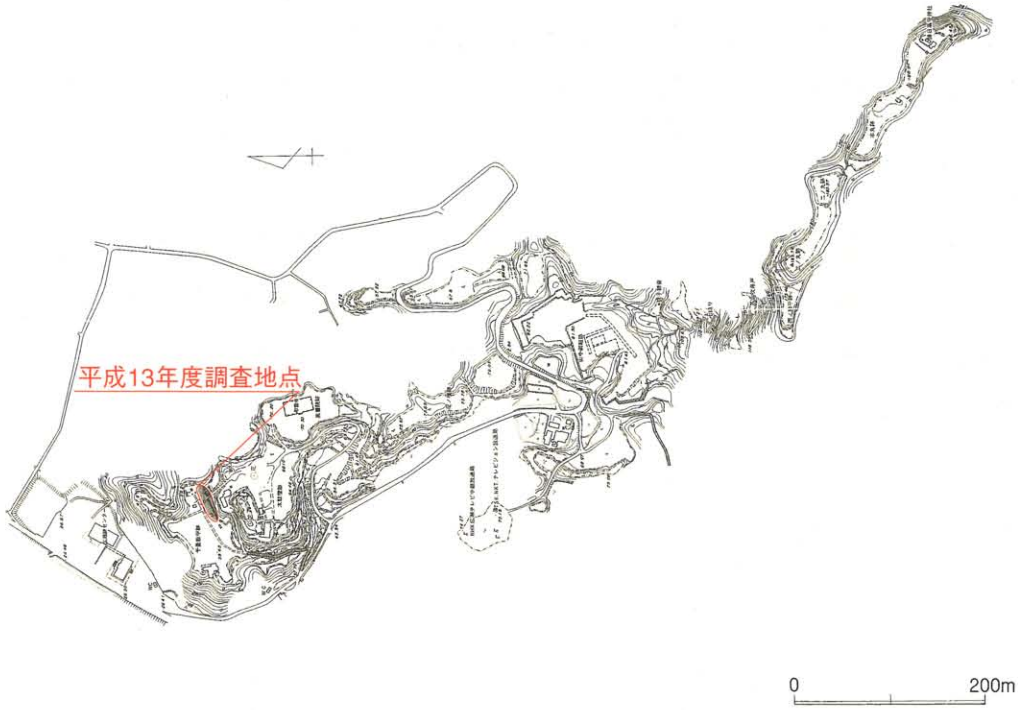
第Ⅱ章　史跡富田城跡（千畳平地区）

第１節　調査に至る経緯

千畳平は史跡富田城跡の北西端に位置する曲輪である。その名前が示すように富田城内でも屈指の面積を持ち、曲輪の周囲には石垣が存在している。また、この曲輪は隣接する太鼓壇曲輪と併せて太鼓壇公園として整備され、桜の名所として人々に親しまれている。

以前から公園内には便益施設が設置されていたが、老朽化が進み、長い間使用できなくなっていたため、かねてより来訪者から、便益施設を新設してほしい旨の要望がよせられていた。そこで広瀬町では、町単独の事業として、便益施設の再建事業を行うこととなり、建設候補地において遺構の有無を確認するため事前の発掘調査を行うこととなった。

千畳平曲輪南端の太鼓壇曲輪切岸下部分（Ⅰ区）及びそこから約10m東側の旧便益施設周辺（Ⅱ区）の２箇所の候補地について発掘調査を行った結果、双方に遺構が存在することが確認されたため、新設する建物は旧便益施設の位置に盛土をした上に建設することとした。ただし浄化槽については、工法的に地下に埋設せざるを得なかったため、遺構にあまり影響のない部分について掘削を行って埋設することとした。



第２図　発掘調査箇所（Ｓ＝1/8000）

第２節　Ⅰ区の調査

Ⅰ区についてはＴ－１を軸としてその周辺にＴ－２～Ｔ－６までトレンチを設定し、調査を行った。斜面部に設定したトレンチであるＴ－２以外はすべて表土下20～30cmで遺構面である岩盤に達した。なお調査地は後世に畑などに利用され、またその後は公園として盛んに利用されていたため若干の撹乱を受けており、遺構面上に堆積している土はほとんどが近・現代の陶磁器やガラス瓶など、廃棄物の混ざった耕作土であった。

Ⅰ区ではピット８、溝状遺構２、石組遺構１を検出した。ピットは形状や配置から３列に分けられ、それぞれ主軸を北東―南西方向にとっている。Ｐ３―Ｐ４は柱間がほぼ1.4mを測り、柱穴の平面形は楕円形で、長軸約45cm、短軸約20cm、深さも約10cm程度とかなり浅いものである。Ｐ５―Ｐ６は溝状遺構ＳＤ０１に沿うように存在し、Ｐ６の北側壁面はＳＤ０１と切りあっており、その間には石塊を並べて補強している様に見受けられる。ピットの規模はＰ５が径約20cm、Ｐ６が約35cmで、深さは共に約30cmを測る。

Ｔ－２では太鼓壇の切岸根元から千畳平曲輪平坦面まで、岩盤を削平して緩傾斜がつけられており、そこに土砂を盛って段が造られていた。段の北部には土砂の流失をふせぐための荒い石組が施されており、石組みには瓦片そして唐津系陶器や土師質土器の破片が混入されていた。

石組みの北側には方形プランで一辺約20cmを測る小型のピット（Ｐ２）、幅約20cmを測り東西に走る浅い溝状遺構ＳＤ０２が存在する。

土壙ＳＫ０１はトレンチ内にかかる部分のみ完掘した。長軸1.5m以上、短軸約1.2m、深さ約80cmを測り、底部のプランはやや瓢箪形を呈している。内部には底部まで近・現代の陶磁器やビンなどの廃棄物がたまっていた。地元の人によると以前千畳平が畑として利用されていた頃、この辺りに水溜めがあったとのことであり、ＳＫ０１がこれにあたるとみられる。

ＳＤ０１北側では、Ｔ－３～Ｔ－５にはピットなどの遺構は存在しなかったが、Ｔ－６ではＰ７・Ｐ８を確認した。Ｐ７はＴ－１で検出したＰ１・Ｐ２とほぼ同型で、長軸約40cm、短軸約20cmを測る。Ｐ８は完掘していないため、Ｐ７との関係は不明であるが、壁面沿いに柱を支えるためとみられる石を並べている。

第３節　Ⅱ区の調査

Ｔ－７・Ｔ－８・Ｔ－９を中心として、旧便益施設北側に設定した調査区である。
調査の結果、Ⅱ区一帯は谷状地形を大規模に埋め立てて敷地を確保していることが判明した。この造成土内からは多量の鉄滓と数片の瀬戸灰釉端反皿の破片が出土した。

調査区内で検出した遺構は通路状遺構１、溝状遺構４、土壙４、小型のピット４である。

通路状遺構の幅は東端部で約70cm、調査区中央付近で約50cmを測る。南北に浅い溝状

遺構ＳＤ０１とＳＤ０２が存在し、これらが通路の側溝であると考えられる。ＳＤ０１は検出長約9.5m、幅約70cm、深さ約15cmで、ＳＤ０２は検出長約3.5m、幅約70cm、深さ約15cmを測り、西側は撹乱を受けているためか消失しており、どこまで伸びていくのかはわからない。ＳＤ０２の北側壁は一部に暗茶褐色土を盛って補修されており、通路面と溝内には土師質土器の破片が散乱していた。

この通路状遺構の東には山麓にある広瀬絣センター裏から千畳平へ至る遊歩道があり、この遺構はその通路と連続しているように見受けられる。

ＳＤ０３は北東―南西方向に走る溝状遺構で、北東端は北へ若干カーブして調査区外へ続いている。溝の断面形は方形を呈し、幅約30cm、深さは約12cmを測る。溝内部からは土師質土器片や信楽系の陶片・瓦片等が出土している。

なお、ＳＤ０３はＳＤ０１によって切られている事から、ＳＤ０３が埋没した後に通路状遺構が作られたと考えられる。

ＳＤ０４は調査区西端で検出した浅い溝状遺構である。主軸を北東―南西にとり、岩盤上に掘り込まれている。東部の造成土部分まで続くと見られるが、撹乱を受けているため確認できなかった。

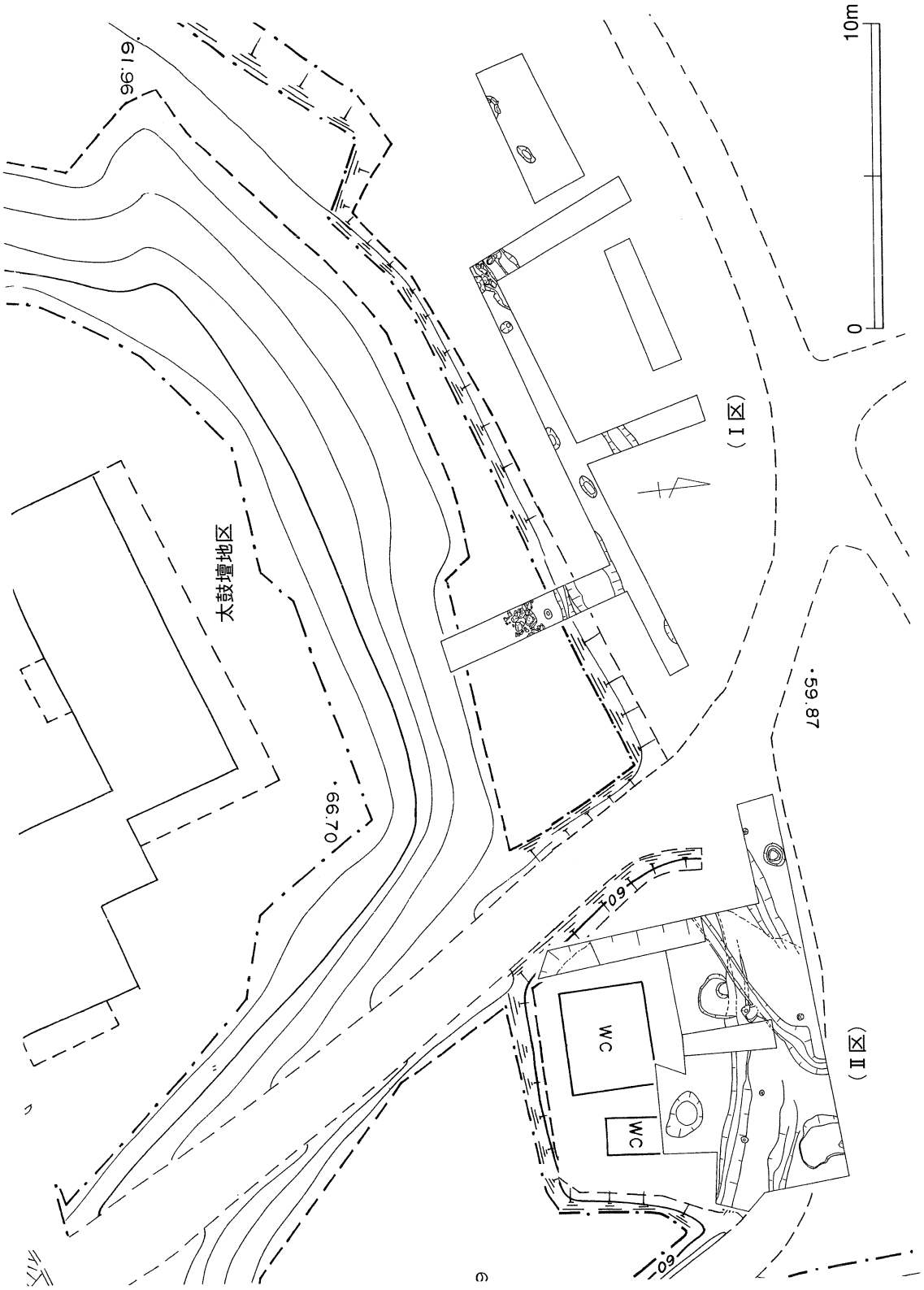
ＳＫ０１は土師質土器廃棄土壙である。一部調査区外であったため全容は不明であるが検出部分の規模は、東西約1.5m、南北約1.4m、深さ約30cmを測る。内部には土砂に混じって京都系土師質土器皿片が多量に廃棄されており、中には完形品もあった。その他白磁小坏片や鉄釘が出土している。

ＳＫ０２は長軸約1.5m、短軸約1.1m、深さ約50cmを測る。不整楕円形の土壙である。内部には淡茶褐色砂質土が堆積していた。出土遺物も無く遺構の性格は不明である。

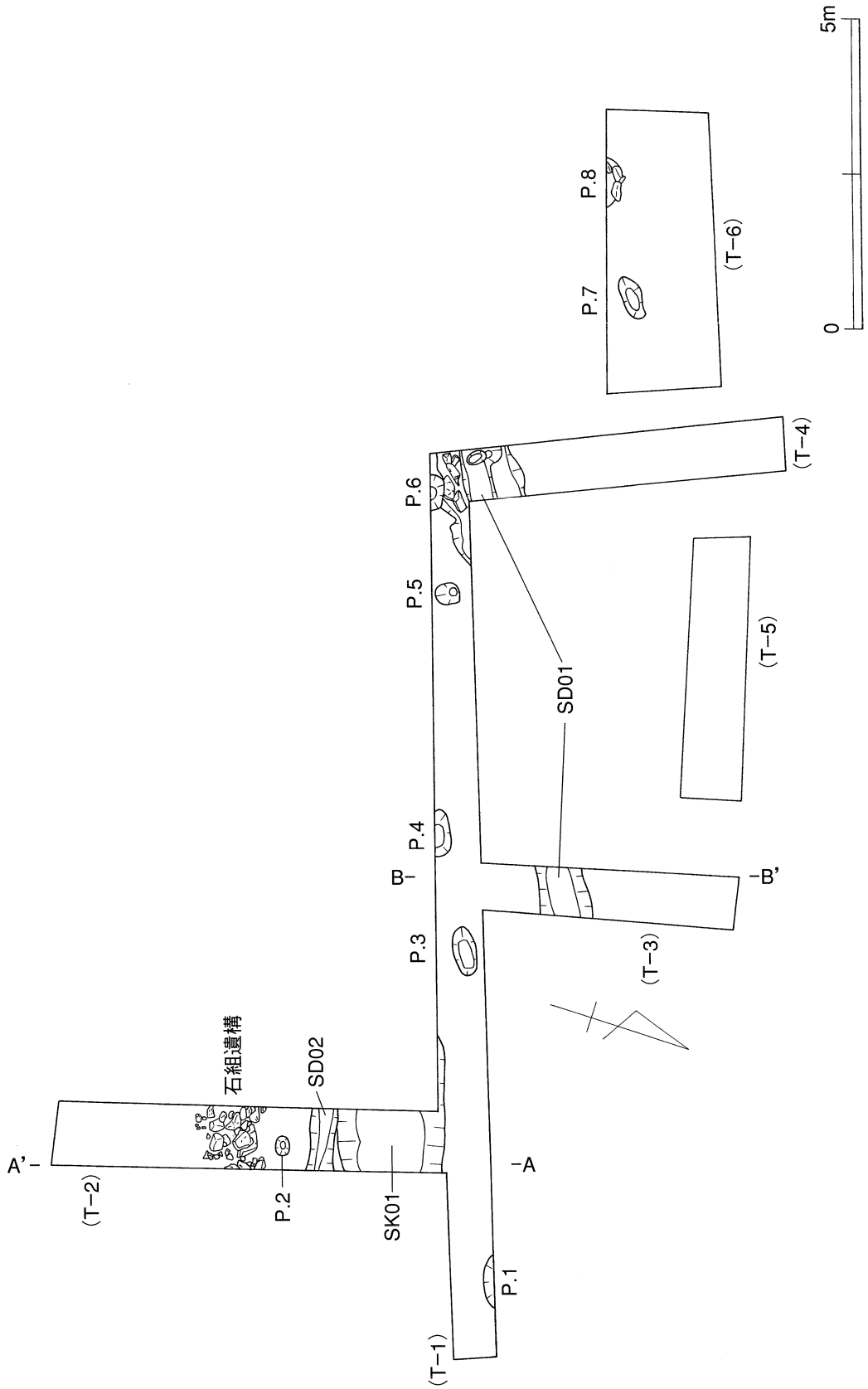
ＳＫ０３は径1.5m、深さ10cmを測る不整円形の土壙である。ＳＤ０１埋没後に掘り込まれており、土壙内北西部には島状の高まりが存在する。遺構の性格ははっきりしないが、その形状から植栽痕とも考えられる。

ＳＫ０４は径約80cmを測る円形の土壙である。中央には約10cmの高まりがある。

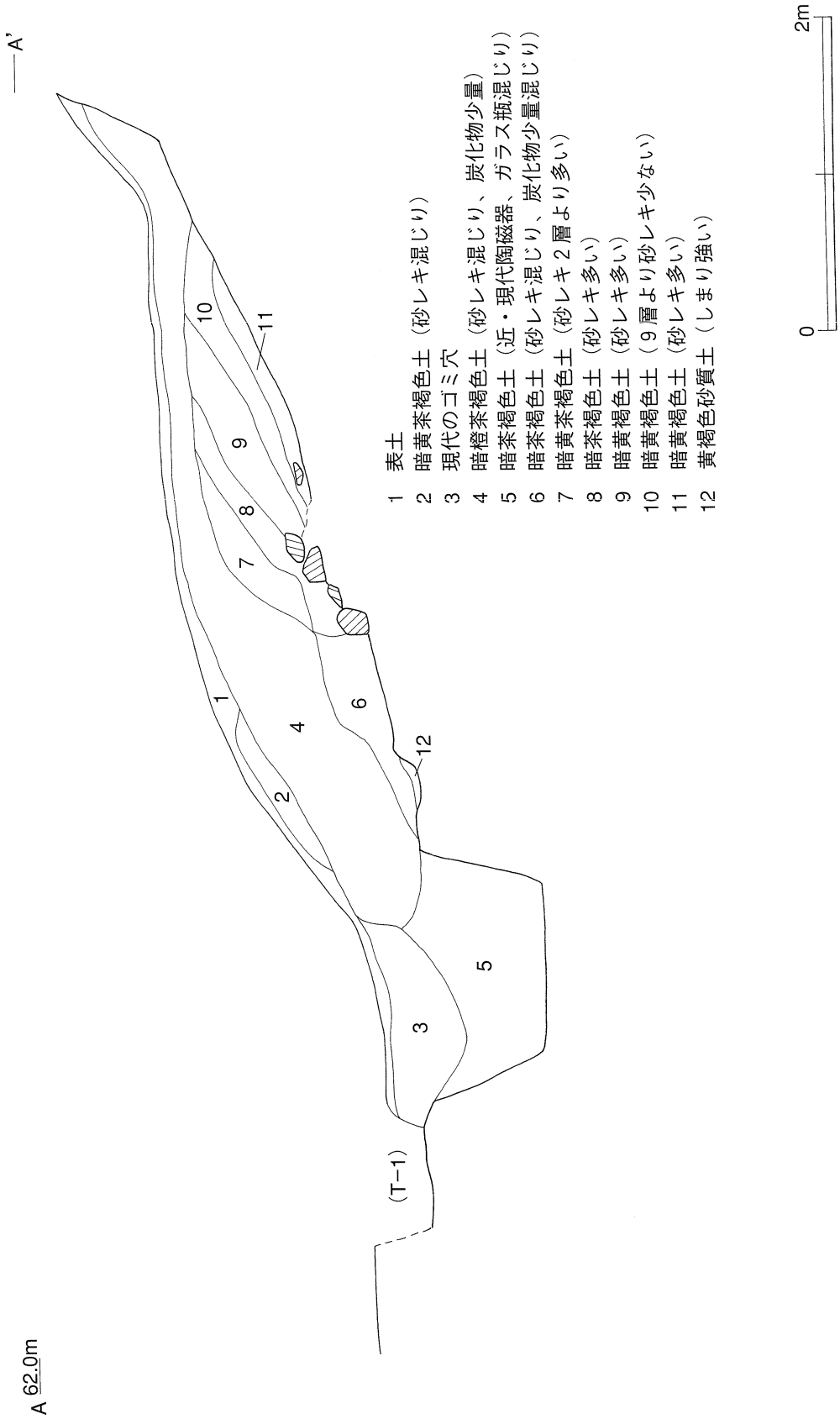
遺構の性格は断定できないが、土層を観察すると、高まりの頂部付近の土が壁面付近の土と異なっており、柱を抜き取った跡にも見えることから、柱穴である可能性もある。



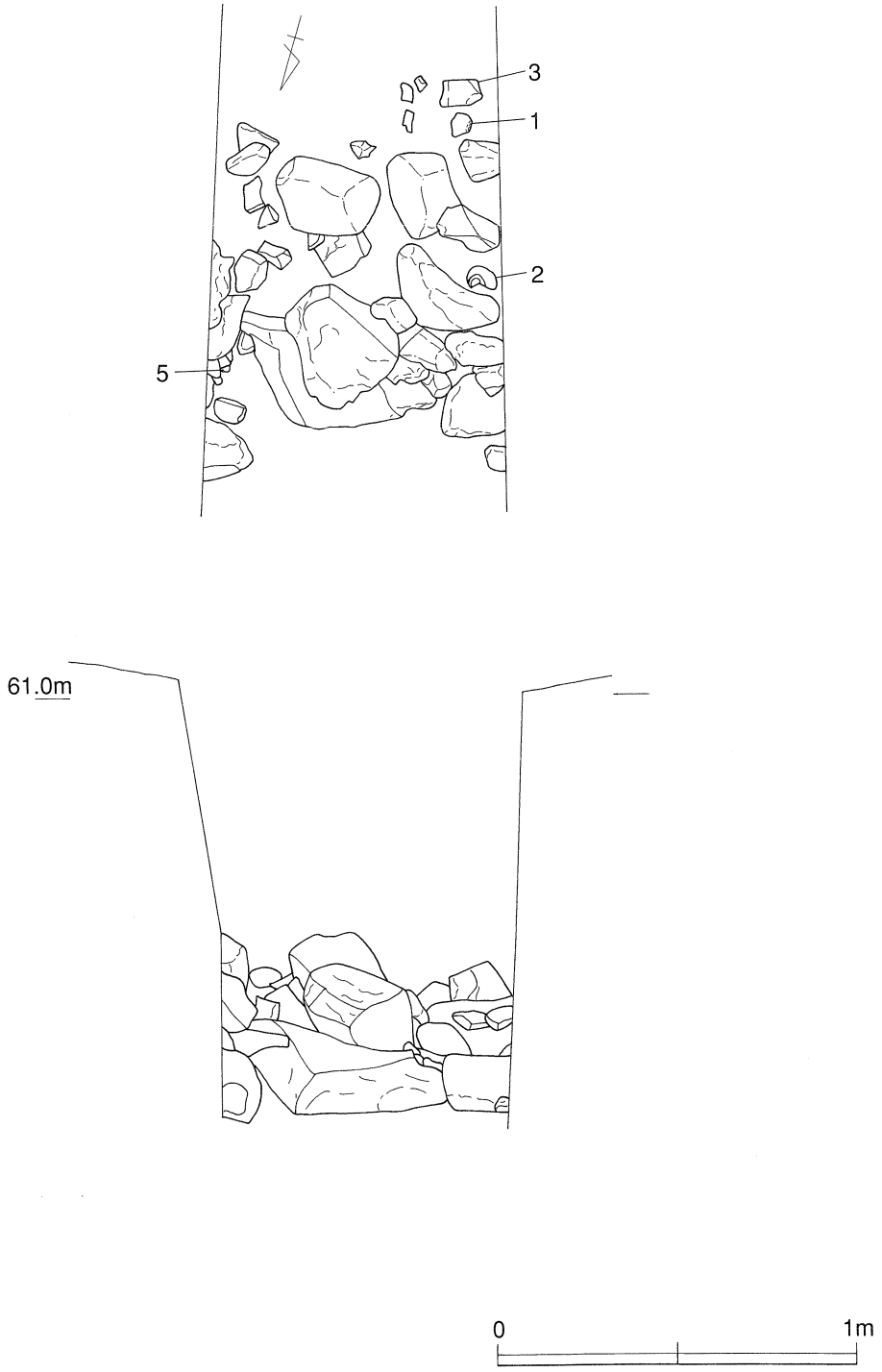
第３図　千畳平地区　遺構平面図（Ｓ＝1/200）



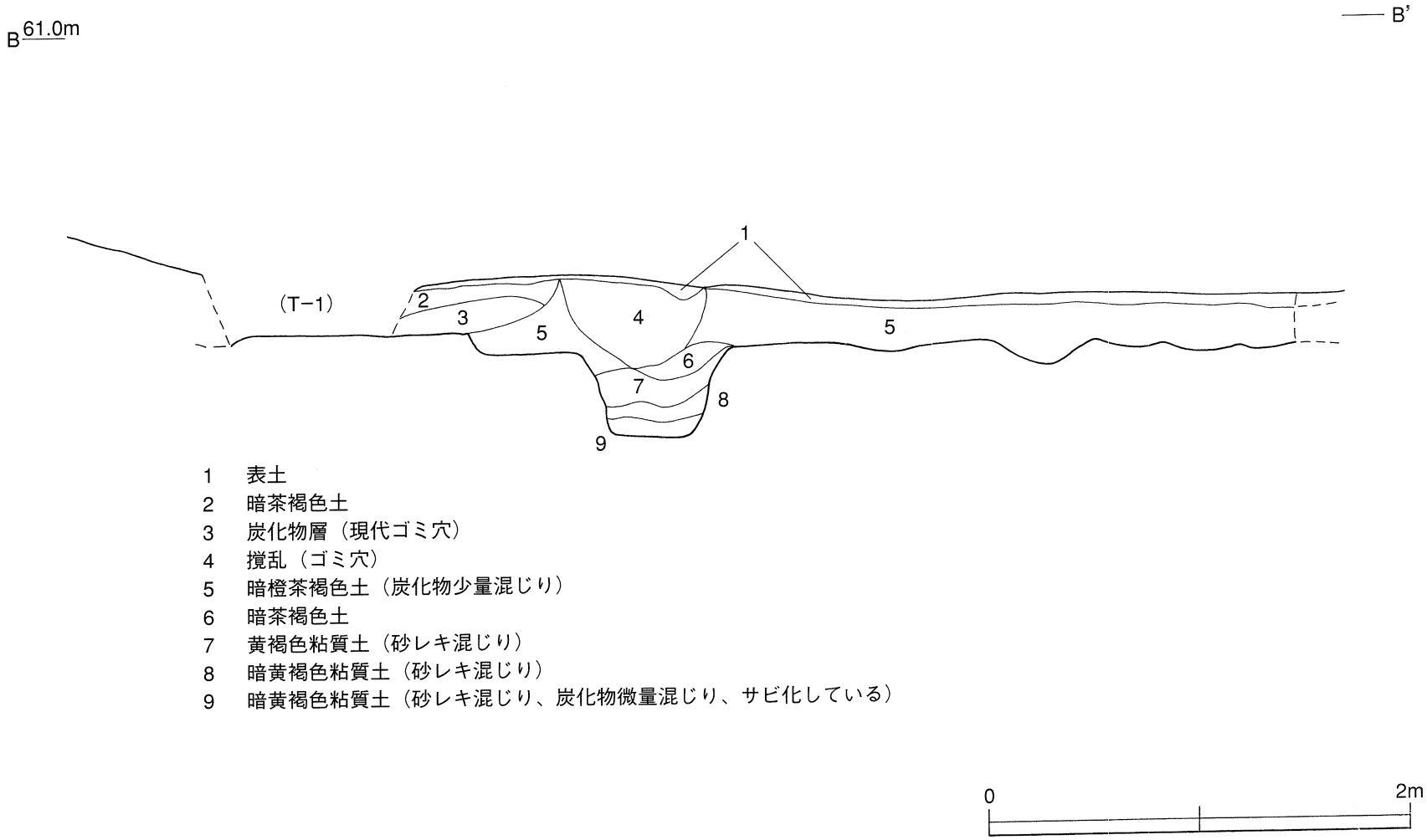
第４図　Ｉ区　遺構平面図（Ｓ＝1/60）



第５図　Ⅰ区　Ｔ－２　土層断面図（Ｓ=1/40）

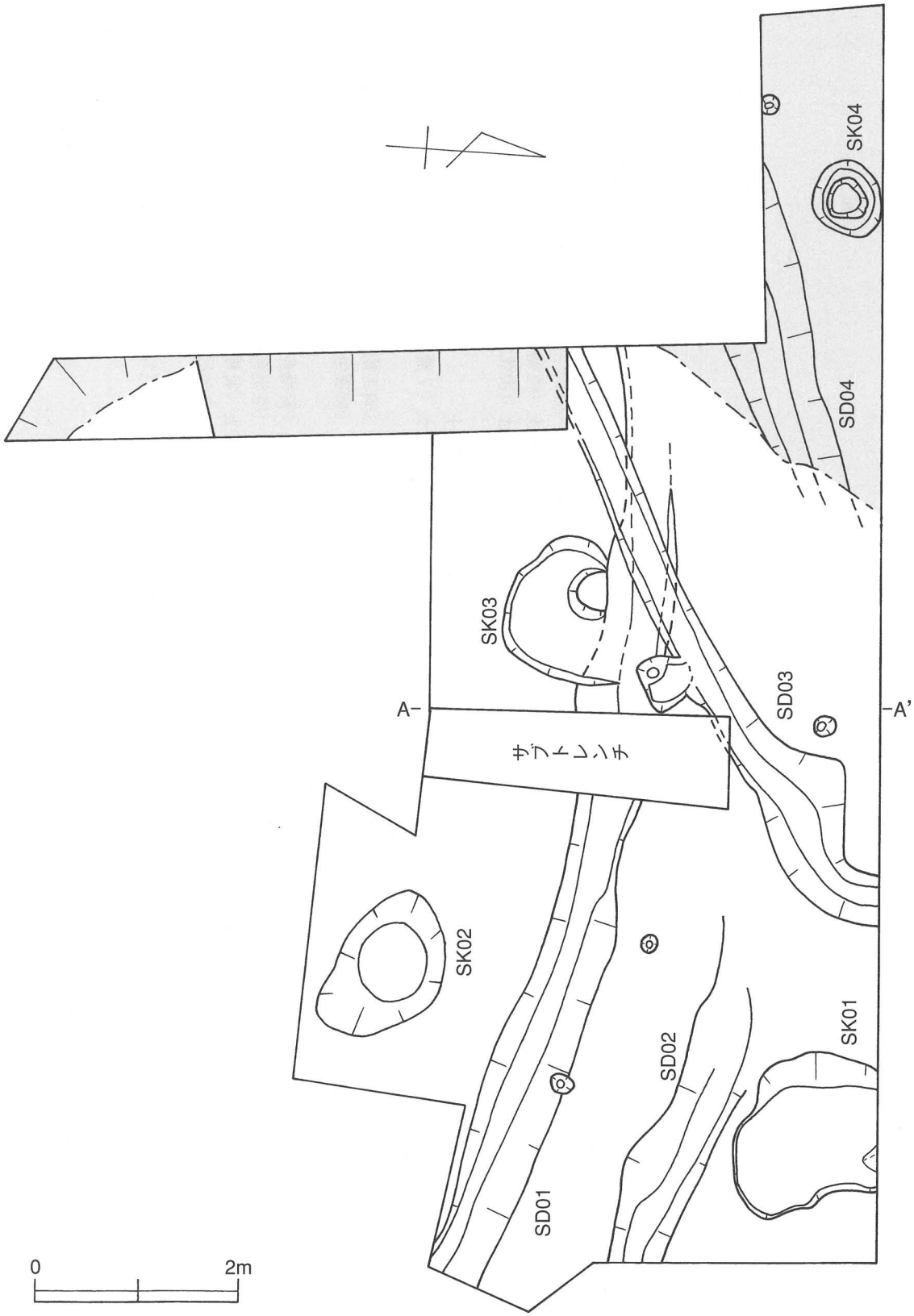


第６図　Ⅰ区　Ｔ－２　石組遺構（Ｓ=1/20）（数字は遺物番号）

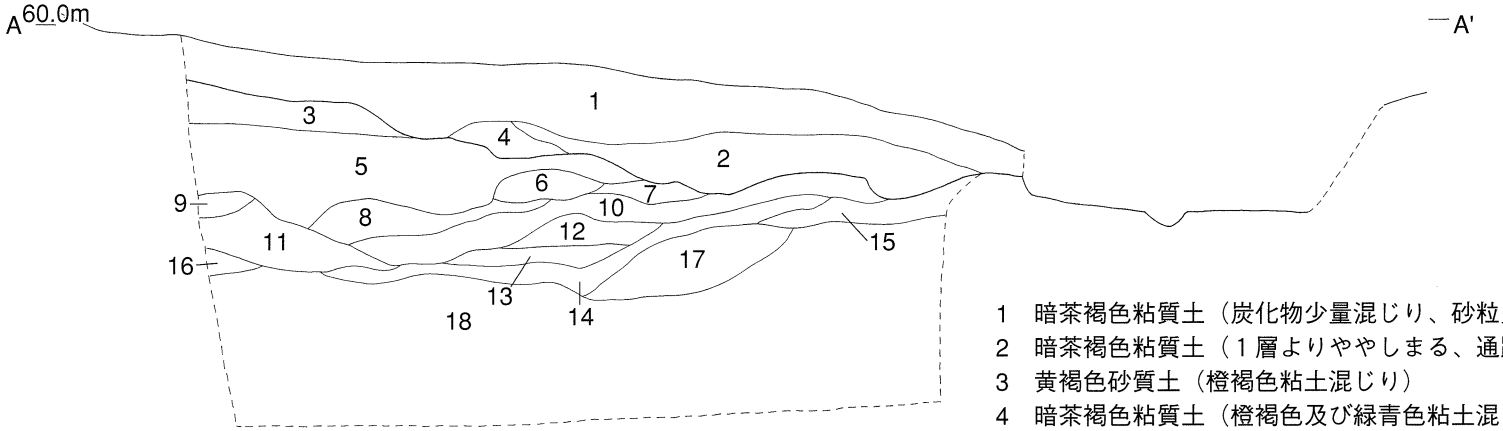


1　表土
2　暗茶褐色土
3　炭化物層（現代ゴミ穴）
4　撹乱（ゴミ穴）
5　暗橙茶褐色土（炭化物少量混じり）
6　暗茶褐色土
7　黄褐色粘質土（砂レキ混じり）
8　暗黄褐色粘質土（砂レキ混じり）
9　暗黄褐色粘質土（砂レキ混じり、炭化物微量混じり、サビ化している）

第7図　Ⅰ区　T－3　SD01土層断面図（S＝1/30）



第８図　Ⅱ区　遺構平面図（トーン部は岩盤）（Ｓ＝1/60）



1　暗茶褐色粘質土（炭化物少量混じり、砂粒多い）
2　暗茶褐色粘質土（１層よりややしまる、通路跡覆土）
3　黄褐色砂質土（橙褐色粘土混じり）
4　暗茶褐色粘質土（橙褐色及び緑青色粘土混じり、土師質土器含む）
5　橙茶褐色砂質土（炭化物微量混じり）
6　黄褐色砂質土
7　暗黄褐色砂質土
8　暗黄褐色砂質土（７層と同じ？）
9　黄褐色砂質土
10　橙褐色砂質土（暗茶褐色土、黄褐色砂質土混じり、炭化物微量含む）
11　橙褐色砂質土（黄褐色砂質土混じり、炭化物微量含む）
12　黄褐色砂質土
13　橙褐色砂質土（黄褐色砂混じり）
14　黄褐色砂質土（茶褐色砂質土混じり）
15　暗茶褐色砂質土（黄褐色砂質土混じり）
16　黄褐色砂質土（白色砂粒子混じり）
17　暗黄茶褐色砂質土
18　暗黄茶褐色砂質土（17層より明るい、炭化物少量、鉄滓２点含む）

0　1m

第９図　Ⅱ区　サブトレンチ土層断面図（S=1/30）

第４節　出土遺物

１．Ⅰ区

（１）Ｔ－２出土遺物（第10・11図）

１～５は石組遺構からの出土品である。１は唐津皿。全体に灰緑色の釉がかかり、見込部に鉄絵の草花文を施す。２は唐津碗で、淡茶褐色の透明感のある釉がかかる。内面には茶せんで撹拌した際のものと見られるすり目が残る。３、４は丸瓦。３は内面にコビキＢと布目痕が残る。内外面ともいぶしで黒灰色。４もコビキＢと布目痕が残る。内面及び端部に黒褐色のいぶしがかかるが、全体は淡褐色で焼成はやや甘いか。５は平瓦。内外面にヘラ調整の痕が残る。黄白色の胎土に、大きいものでは約１cmの白色や赤褐色の砂粒を多量に含む。いぶしは部分的で、全体は灰色。また、図化できなかったが、同遺構内からは京都系の土師質土器皿も出土している。

６はタイの四耳壺か？にぶい赤褐色の胎土に、やや緑がかった褐釉がかかる。胴部付近の破片で、周囲を打ち欠いて円盤状に成形している。７は産地不明だが備前系陶器甕か？底部～胴部の破片で胎土は黒灰色。外面はヘラケズリ調整、内面は刷毛目調整。８、９は丸瓦。８は内面がコビキＡで、吊紐痕と布目痕も残る。外面には、丁寧なヘラ調整の痕も残る。いぶしも良く、内外面共に黒灰色。９は内面がコビキＢで、内外面ともいぶしで黒灰色。10、11は平瓦。10には端部にコビキＢ痕が残る。全体はいぶしで黒灰色。11は、うっすらといぶしがかかり、灰色。

（２）Ｔ－３出土遺物（第12図）

12～14はＳＤ０１内からの出土品である。12は第３トレンチを掘った際に、ＳＤ０１の底部より出土している。京都系土師質土器皿の底部を加工した円盤状土製品で、周囲を丁寧に研磨し、底部内面は丁寧なナデ。13、14は第４トレンチ内ＳＤ０１上層より出土した京都系の土師質土器皿。

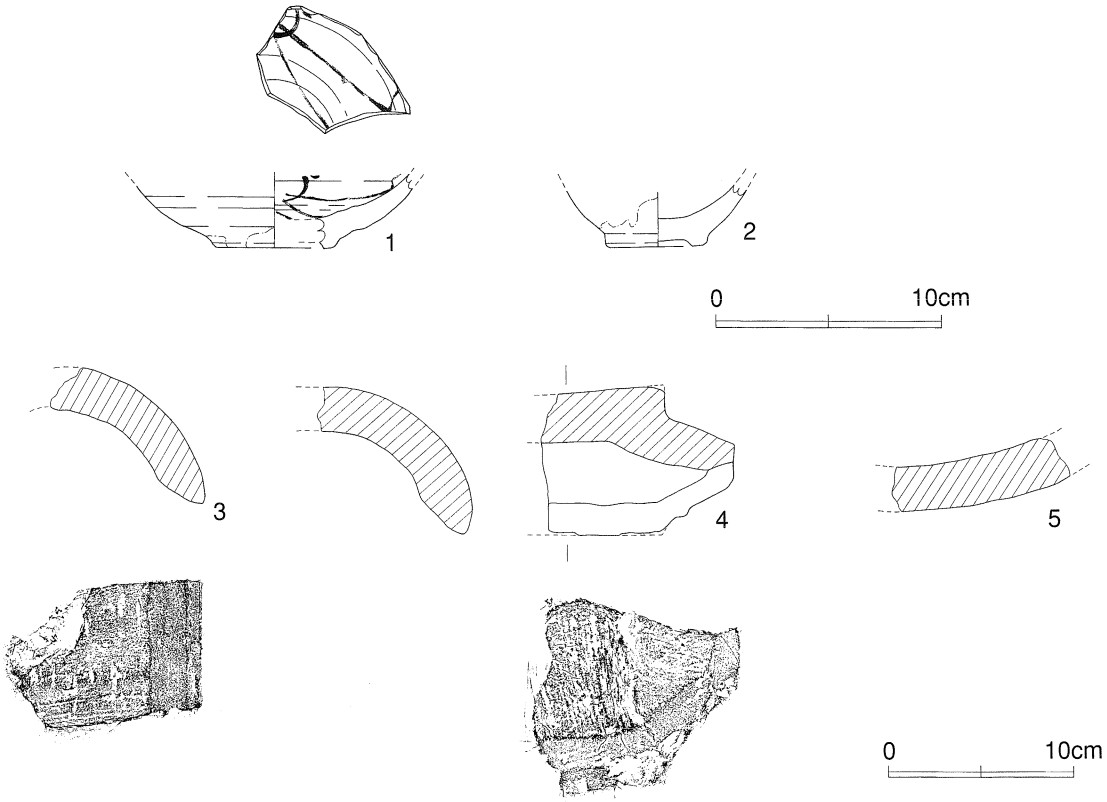
（３）Ⅰ区出土遺物（第13図）

15は第４トレンチより、16は第６トレンチより出土している。15は産地不明の陶器碗で、胴部中ほどまで、やや黄みがかった透明釉がかかる。胴部外面、高台共にケズリで調整する。16は中国製染付皿。内面には２条の界線をめぐらし、外面は２条の界線と草花文を施す。

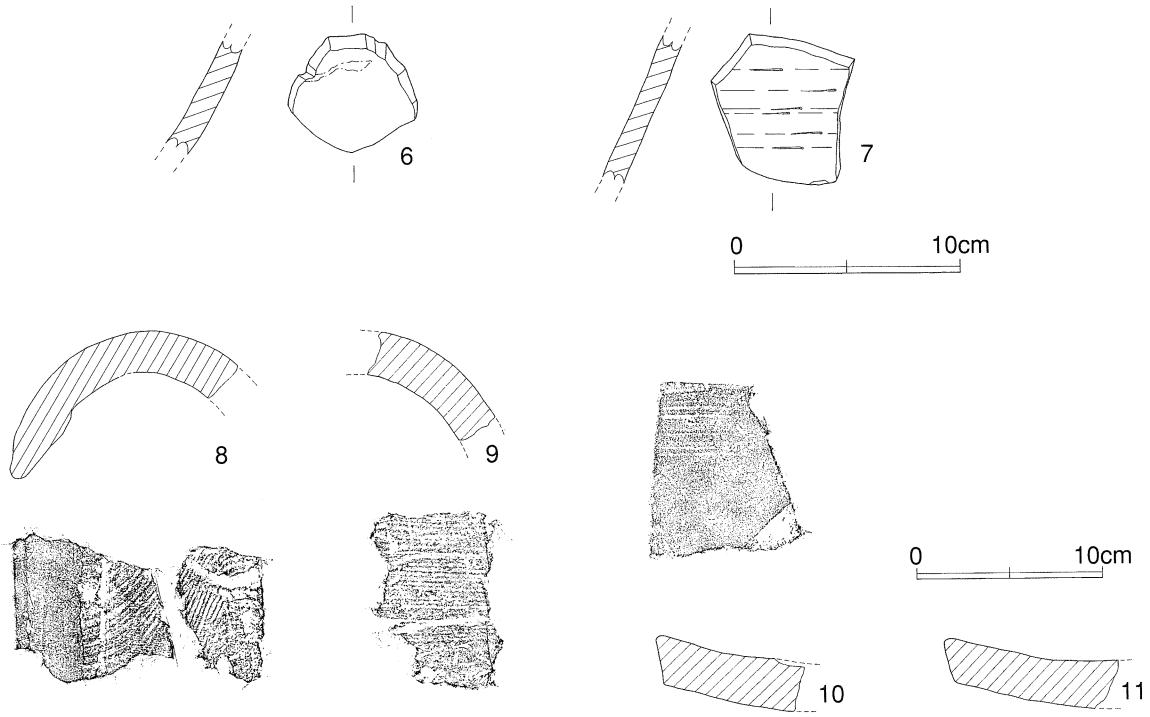
２．Ⅱ区

（１）遺構面直上出土遺物（第14図）

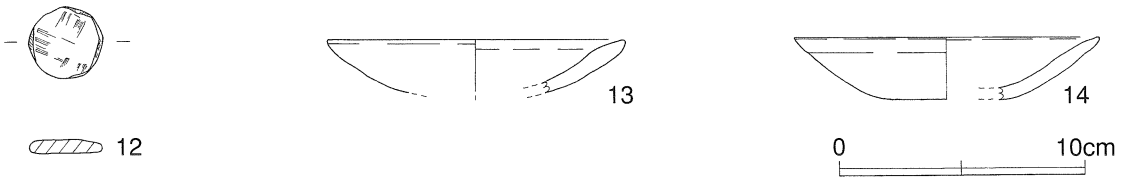
17～20は、京都系の土師質土器皿。19は灯明皿で、内外面にいぶしが付着している。口縁部の形態に２種類のものが見られ、17～19は底部からやや丸みを持って立ち上がった口縁部を強くつまみ出し、内面に沈線状のくぼみを残す。20はややまっすぐ立ち上がり、やや厚みのある端部をもつ。



第10図　Ⅰ区　T－2　石組遺構出土遺物
（1，2はS=1/3、3～5はS=1/4）



第11図　Ⅰ区　T－2　出土遺物
（6，7はS=1/3、8～11はS=1/4）



第12図　Ⅰ区　SD01出土遺物（S＝1/3）

第13図　Ⅰ区　出土遺物（S＝1/3）

（２）通路状遺構出土遺物（第15図）

Ⅱ区では、両側に側溝（ＳＤ０１，ＳＤ０２）を掘った通路状の遺構が確認されているが、21、22は通路上面から、23は側溝のＳＤ０１より出土。21～23は京都系の土師質土器皿。また、図化できなかったが、ＳＤ０１上に掘り込まれたＳＫ０２の覆土からは、見込みに鉄絵の草花文を施した唐津皿が出土している。

（３）ＳＤ０３出土遺物（第16図）

24～29は京都系の土師質土器皿。24、28は灯明皿で、内外面にススが付着。口縁部の形態から３種類のものが見られる。24はやや厚みのある口縁端部を持つもの。25、26は底部よりまっすぐ立ち上がった口縁部をもつもの。27～29は丸みをもって立ち上がり、内面にごくわずかなくぼみを残すもの。30は陶器鉢か。産地は不明である。表面は火を受けて荒れている。茶褐色の釉がかかり、口縁部は釉をかき取る。31は平瓦。焼きはやや甘いものの、表面はいぶしで黒灰色。32は鉄釘で、長さ4.7cm、幅0.7cm。

（４）ＳＫ０１出土遺物（第17図）

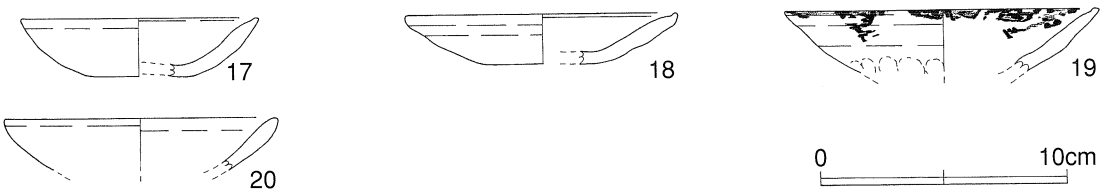
33～37は京都系の土師質土器皿。34、35、37は灯明皿で、内外面にススが付着。38は白磁の小坏。39は鉄釘で、長さ4.9cm。幅0.7cm。

（５）遺構面造成土内出土遺物（第18図）

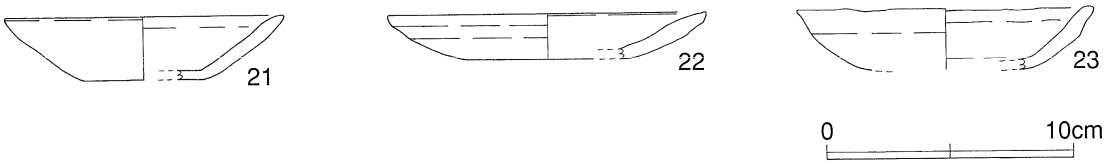
40～46は京都系の土師質土器皿。47、48は瀬戸美濃の灰釉皿。いずれも口縁部を欠くが、立ち上がりから推測すると、47は直縁、48は端反の口縁をもつ皿か？49は信楽壺。内面は丁寧なナデで、外面は下方へ粘土をナデ下ろしの痕が見られ、その後丁寧なナデ調整で仕上げる。50は用途不明の鉄製品で、長さ7.9cm、幅0.5cm。51は用途不明の鉄製品。縦2.5cm、横1.5cm、厚さ0.2cm。

（６）Ⅱ区出土遺物（第19図）

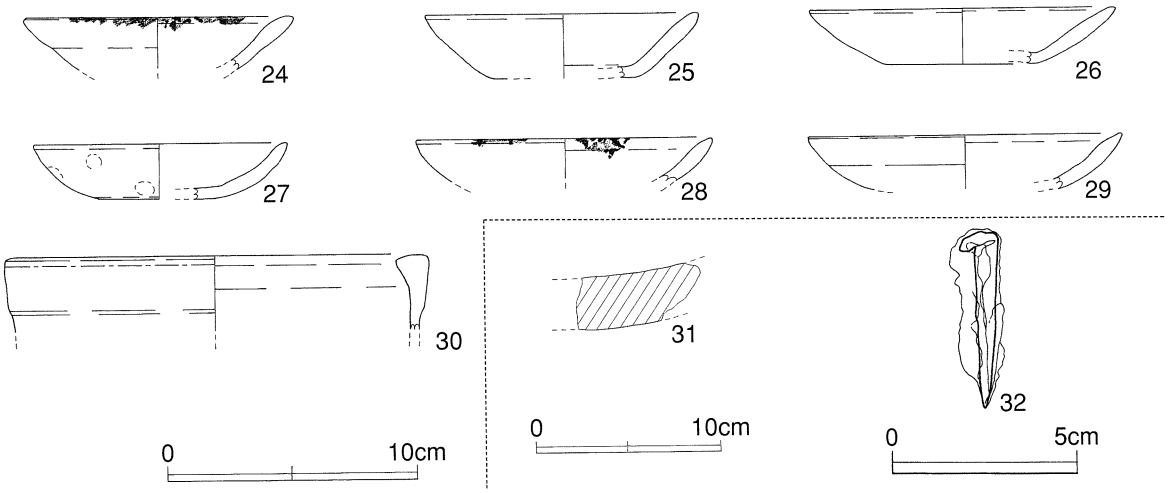
52、53は京都系の土師質土器皿。54～56は近世の陶磁器と思われる。54は染付皿で見込みに１条の界線を施す。高台内は無釉で削り出し。55は肥前系白磁皿か？56は、白磁皿か？57は信楽壺の胴部。内面は荒いナデだが、外面は丁寧な刷毛調整を施す。58は銅銭で、「寛永通宝」である。



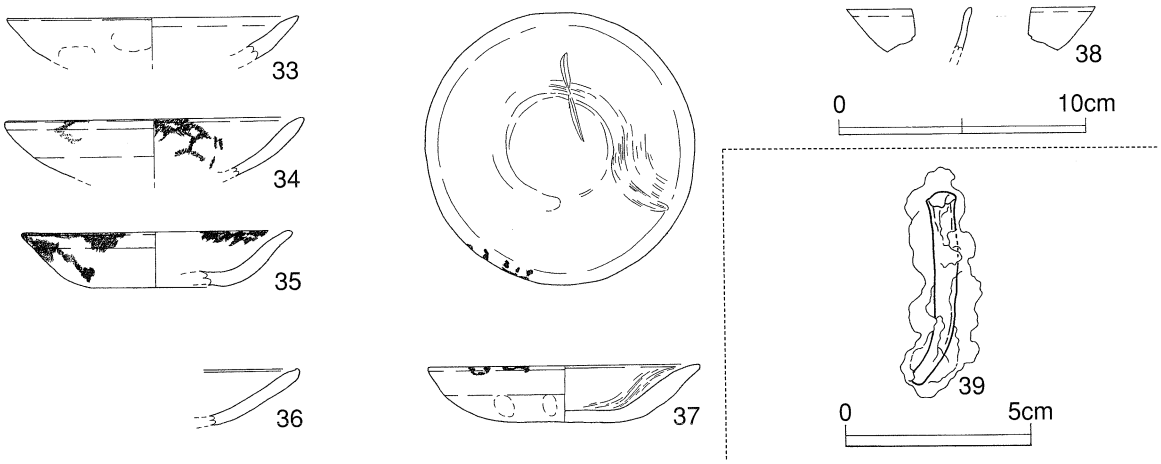
第14図　Ⅱ区　遺構面出土遺物（S＝1/3）



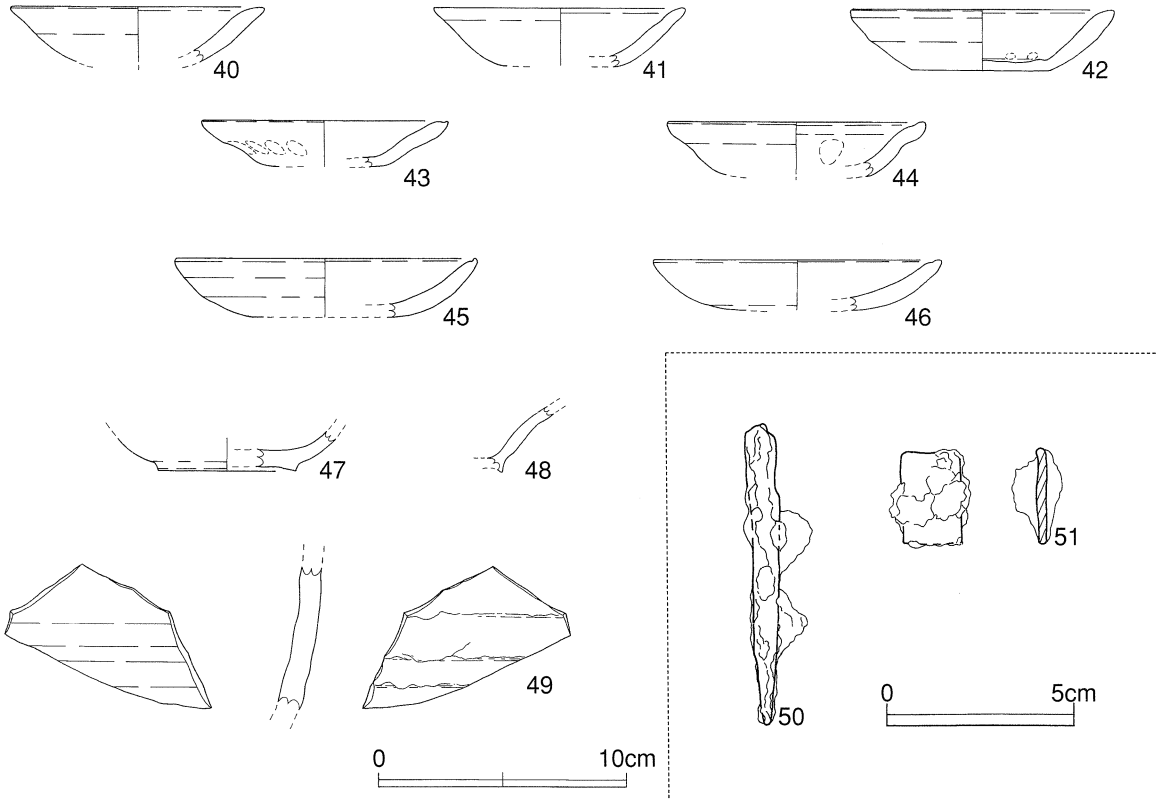
第15図　Ⅱ区　通路状遺構出土遺物（S＝1/3）



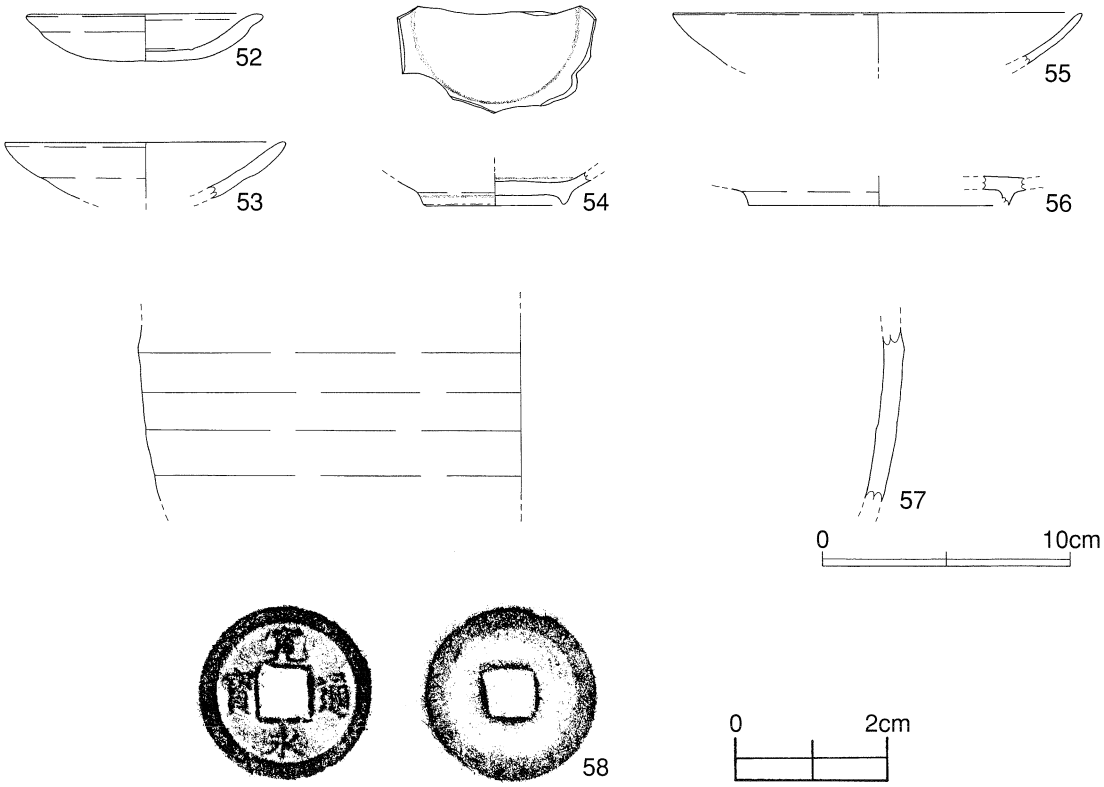
第16図　Ⅱ区　SD03出土遺物（24～30はS＝1/3、31はS＝1/4、32はS＝1/2）



第17図　Ⅱ区　SK01出土遺物（33～38はS＝1/3、39はS＝1/2）



第18図　Ⅱ区　遺構面造成土内出土遺物
（50，51はＳ＝1/2、その他はＳ＝1/3）

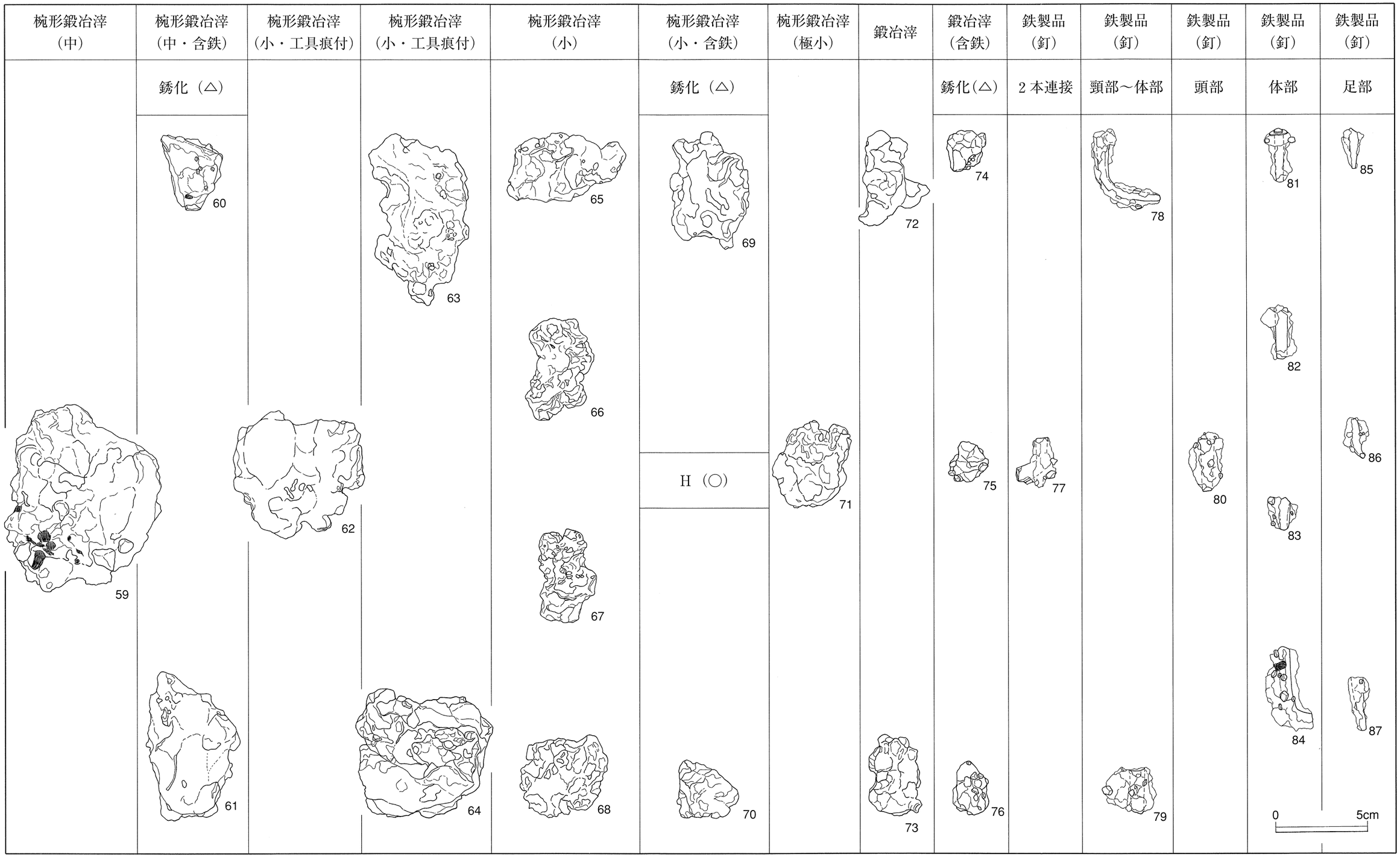


第19図　Ⅱ区　出土遺物
（52～57はＳ＝1/3、58は原寸大）

（７）千畳平地区製鉄関連遺物（第20図）

千畳平地区では、Ⅰ区及びⅡ区遺構面造成土中から鍛冶に関連した遺物が出土している。第20図は穴澤義功氏の鑑定による鍛冶滓及び鉄製品の分類図で、62はⅠ区Ｔ－２石組遺構、71はⅡ区ＳＤ０３出土で、その他は全てⅡ区造成土内からの出土である。

59～71は椀形鍛冶滓である。60・61・69・70は内部に金属鉄を若干含むが、70以外は全て銹化している。62～64には鍛冶棒を差し込んだ痕跡が見られ、図では62・63は下から上へ、64は左から右へ棒を差している。72～76は鍛冶滓で、74～76は金属鉄を若干含むが銹化している。77～87は鉄製品の釘である。中には曲がったものもあり、使用済みのものと考えられる事から、これらは鉄滓とは直接関係は無いと思われるが、同じく造成土中から出土したため一緒に掲載した。



第20図　千畳平地区　製鉄関連遺物分類図（S＝1/2）
（62はⅠ区　T－2　石組遺構、71はⅡ区　SD03、その他はⅡ区　造成土内出土）

表２　千畳平地区　土器・陶磁器観察表

No.	地区	出土位置(層位)	器種・器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色　調	胎　土	焼　成	備　考
1	Ⅰ区	T-2 石組遺構	施釉陶器皿		5.4		灰緑色	淡赤褐色　微砂粒	良好	肥前　見込に鉄絵の草花文
2	Ⅰ区	T-2 石組遺構	施釉陶器碗		4.6		暗茶褐色	淡茶褐色　微砂粒	良好	肥前　内面にすり目痕
6	Ⅰ区	T-2	褐釉陶器壺				にぶい緑褐色	にぶい赤褐色　細かな砂粒	良好	南蛮？四耳壺？円盤状加工品か？
7	Ⅰ区	T-2	陶器壺				黒褐色	黒褐色　微砂粒	良好	南蛮？四耳壺？
12	Ⅰ区	T-3 SD01(底部)	土師質土器	φ 3.0		0.5	淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系円盤状加工品か？
13	Ⅰ区	T-4 SD01(上層)	土師質土器	12.0			淡黄褐色～黒褐色	密	やや不良	京都系
14	Ⅰ区	T-4 SD01(上層)	土師質土器	12.4	5.4	2.4	ややピンクの淡黄褐色	密	良好	京都系
15	Ⅰ区	T-4 SD01(上層)	陶器碗		6.2		淡橙褐色	淡橙褐色　微砂粒	良好	
16	Ⅰ区	T-6(表土)	染付小坏？				染付：濃青色	灰白色　密	良好	中国　外面に２条の界線と草花文、内面端部に２条の界線
17	Ⅱ区	T-7(遺構面直上)	土師質土器	9.6	4.2	2.3	淡黄褐色	密	良好	京都系
18	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	11.0	4.6	2.0	淡黄褐色	～2㎜の砂粒	良好	京都系
19	Ⅱ区	遺構面直上	土師質土器	16.8			やや暗い淡黄褐色	密	良好	京都系
20	Ⅱ区	遺構面直上	土師質土器	11.0			淡黄褐色	微砂粒多い	良好	京都系
21	Ⅱ区	通路状遺構	土師質土器	11.2	5.0	2.5	淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系
22	Ⅱ区	通路状遺構	土師質土器	12.8	6.6	1.8	淡黄褐色	密	良好	京都系
23	Ⅱ区	通路状遺構	土師質土器	12.0			淡黄褐色～黒褐色	密	良好	京都系
24	Ⅱ区	SD03	土師質土器	10.8			淡黄褐色	密	良好	京都系
25	Ⅱ区	SD03	土師質土器	11.0			淡黄褐色	密	良好	京都系
26	Ⅱ区	SD03	土師質土器	12.4	6.0	2.2	淡黄褐色	細かな砂粒	良好	京都系
27	Ⅱ区	SD03	土師質土器	10.2	4.4	2.2	ややピンクの淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系
28	Ⅱ区	SD03	土師質土器	12.0			やや暗い淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系・灯明皿
29	Ⅱ区	SD03	土師質土器	12.6			淡黄褐色	密	良好	京都系
30	Ⅱ区	SD03	陶器鉢	17.0			茶褐色の気泡の多い釉	淡黄褐色　密	良好	南蛮？　表面に被熱　口縁部釉かき取り
33	Ⅱ区	SK01	土師質土器	11.8			淡黄褐色～黒褐色	微砂粒	良好	京都系・灯明皿
34	Ⅱ区	SK01	土師質土器	12.0			淡黄褐色	密	良好	京都系・灯明皿
35	Ⅱ区	SK01	土師質土器	11.0	5.2	2.2	茶褐色	密	良好	京都系
36	Ⅱ区	SK01	土師質土器				淡黄褐色	密	良好	京都系・灯明皿
37	Ⅱ区	SK01	土師質土器	11.0	4.4	2.3	淡黄灰白色	微砂粒	良好	京都系
38	Ⅱ区	SK01	白磁小坏				白色	灰白色　密	良好	中国
40	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	10.2			やや暗い淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系
41	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	10.2			淡黄灰白色	細かな砂粒	良好	京都系
42	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	10.6	5.4	2.4	淡黄褐色	微砂粒多い	良好	京都系
43	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	10.0			淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系
44	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	10.4			淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系
45	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	11.2			淡黄褐色	微砂粒	良好	京都系
46	Ⅱ区	造成土内	土師質土器	11.6			やや暗い淡黄褐色	微砂粒多い	良好	京都系
47	Ⅱ区	造成土内	灰釉皿		5.6		淡緑色	淡黄褐色　密	良好	瀬戸美濃系
48	Ⅱ区	造成土内	灰釉端反皿				淡緑色	淡黄褐色　密	良好	瀬戸美濃系
49	Ⅱ区	造成土内	陶器壺				にぶい赤褐色～茶褐色	にぶい灰色　～1.5㎜の砂粒	良好	信楽系
52	Ⅱ区	一括	土師質土器	9.6		1.9	淡黄褐色～黒褐色	細かな砂粒	良好	京都系
53	Ⅱ区	一括	土師質土器	11.4			淡黄褐色	密	良好	京都系
54	Ⅱ区	一括	染付皿		5.6		青白色	灰白色　～1.5㎜の砂粒	良好	中国？　近世？　見込に界線
55	Ⅱ区	T－7(表土)	白磁皿	16.4			青白色	白色　密	良好	肥前近世？
56	Ⅱ区	T－7(表土)	白磁皿		10.4		青白色	白色　密	良好	近世？
57	Ⅱ区	一括	陶器壺				赤褐色	灰色　～1.5㎜の砂粒	良好	信楽系

表3　千畳平地区　瓦観察表

No.	地区	出土位置	種類	厚(cm)	色調	胎　土	特　徴	備　考
3	Ⅰ区	T-2 石組遺構	丸瓦	2.3	黒灰色	黄白色 砂粒はほとんど含まない	内面に布目痕　いぶし	コビキB
4	Ⅰ区	T-2 石組遺構	丸瓦	2.4	淡褐色	灰色 微砂粒少量	内面に布目痕　いぶし	コビキB
5	Ⅰ区	T-2 石組遺構	平瓦	2.5	灰色	黄白色 大粒の砂粒と微砂粒	いぶし	
8	Ⅰ区	T-2	丸瓦	2.2	黒灰色	灰色 微砂粒少量	内面に吊り紐痕、布目痕　いぶし	コビキA
9	Ⅰ区	T-2	丸瓦	2.4	黒灰色	黄灰色 微砂粒	いぶし	コビキB
10	Ⅰ区	T-2	平瓦	2.5	黒灰色	黄白色 微砂粒	いぶし	コビキB
11	Ⅰ区	T-2	平瓦	2.7	灰色	黄灰色 ～3mmの砂粒	いぶし	
31	Ⅱ区	SD03	平瓦	2.8	黒灰色	灰色 微砂粒少量	いぶし	

表4　千畳平地区　金属器観察表

No.	地区	出土位置	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
32	Ⅱ区	SD03	鉄釘	4.7	0.7		
39	Ⅱ区	SK01	鉄釘	4.9	0.7		
50	Ⅱ区	造成土内	鉄製品	7.9	0.5		用途不明
51	Ⅱ区	造成土内	鉄製品	2.5	1.5	0.2	用途不明
58	Ⅱ区	表土	銅銭		2.3	0.1	寛永通宝

表5　千畳平地区　製鉄関連遺物観察表

No.	種　類	地区	出土位置	計測値				磁着度	メタル度	備　考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)			
59	椀形鍛冶滓(中)	Ⅱ区	造成土内	9.8	8.2	4.8	230.0	4		
60	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	Ⅱ区	造成土内	4.4	3.0	2.5	30.0	3	錆化(△)	
61	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	Ⅱ区	造成土内	8.0	5.1	3.7	130.0	5	錆化(△)	
62	椀形鍛冶滓(小・工具痕付)	Ⅰ区	T-2　石組遺構	6.6	7.2	4.2	138.0	4		
63	椀形鍛冶滓(小・工具痕付)	Ⅱ区	造成土内	8.8	4.7	4.1	137.0	2		
64	椀形鍛冶滓(小・工具痕付)	Ⅱ区	造成土内	7.0	7.4	4.5	198.0	3		
65	椀形鍛冶滓(小)	Ⅱ区	造成土内	3.7	6.0	1.8	37.0	3		
66	椀形鍛冶滓(小)	Ⅱ区	造成土内	5.6	3.0	2.4	32.0	2		
67	椀形鍛冶滓(小)	Ⅱ区	造成土内	5.0	2.8	2.3	30.0	2		
68	椀形鍛冶滓(小)	Ⅱ区	造成土内	4.2	4.7	2.8	50.0	2		
69	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	Ⅱ区	造成土内	5.7	4.2	3.0	110.0	3	錆化(△)	
70	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	Ⅱ区	造成土内	3.3	3.4	1.6	20.0	4	H (◯)	
71	椀形鍛冶滓(極小)	Ⅱ区	SD03	4.8	4.2	2.0	40.0	2		
72	鍛冶滓	Ⅱ区	造成土内	5.0	3.4	1.7	20.0	2		
73	鍛冶滓	Ⅱ区	造成土内	4.3	2.9	2.9	30.0	2		
74	鍛冶滓(含鉄)	Ⅱ区	造成土内	2.2	2.1	1.2	10.0	3	錆化(△)	
75	鍛冶滓(含鉄)	Ⅱ区	造成土内	2.3	2.2	1.7	10.0	3	錆化(△)	
76	鍛冶滓(含鉄)	Ⅱ区	造成土内	1.9	2.7	1.3	10.0	3	錆化(△)	
77	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	2.7		0.7	10.0	3		2本連接
78	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	4.4		0.8	10.0	3		頸部～体部
79	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	2.5		0.7	15.0	3		頸部～体部
80	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	3.3		0.5	10.0	3		頭部
81	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	3.0		0.6	10.0	4		体部
82	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	3.0		0.7	10.0	4		体部
83	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	1.8		0.7	10.0	3		体部
84	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	1.9		0.6	20.0	4		体部
85	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	2.1		0.6	5.0	3		足部
86	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	2.1		0.5	8.0	3		足部
87	鉄製品(釘)	Ⅱ区	造成土内	2.9		0.6	8.0	3		足部

第５節　まとめ

千畳平地区では、調査面積は少なかったが、比較的多くの遺構が検出された。遺構面は後世に撹乱を受けていたが、遺構内から出土した瓦の製作技法（注１）や唐津系陶器などの年代観（注２）から、主として1600年前後の遺構であると考えられる。

Ⅰ区では風化花崗岩の岩盤上に遺構が掘られており、トレンチ内からピット列と溝状遺構そして石組を検出した、これらはほぼ同軸で並んでおり、ピットはセット関係があると考えられるが、これらが建物の柱穴かそれとも柵などのものかは不明である。

出土した土器・陶磁器の破片点数は土師質土器片７、備前系陶器が１、肥前（唐津）系陶器２、中国青花１、産地不明陶器３で、瓦は平瓦39、丸瓦７であった。

Ⅱ区については斜面を大量の土砂を用いて埋め立てることにより敷地を拡張しており、その上に溝や土壙が掘り込まれていた。

遺構面造成土中には若干の瀬戸灰釉皿片と共に多くの鉄滓と鉄製品（図20）が含まれていた。鉄滓は鍛冶作業によって生じる椀形鍛冶滓とみられる。鉄製品は全て釘である。中には湾曲したものもあることから、建物に使用されていたものが廃棄されたものであると考えられる。これらの鉄滓がどこから運ばれてきたのかは不明であるが、城内で釘などを製造していたものと考えられる。なお、調査区付近の太鼓壇南側に鍛冶床と呼ばれる区域が存在し注意される。

遺構面上では側溝を伴う通路状遺構を検出し、上面には土師質土器片が散乱していた。この通路状遺構は広瀬絣センター裏から千畳平に登る遊歩道とほぼ同位置に検出されており、この遊歩道のルートは当時から利用されていたとも考えられる。

Ⅱ区からの土器・陶磁器の破片点数は土師質土器156、備前系１、肥前（唐津）系１、瀬戸美濃系２、信楽系２、白磁１、不明２で、瓦は平瓦のみ５点であった。この内造成土内からの出土品は、土師質土器45、瀬戸美濃系２、瓦１である。

通路状遺構の性格を考える上で参考となるものに、明治44年刊行の松陽新報社発行雲陽軍実記（以下、『松陽版』とする）の挿絵の月山城図がある（図版14、注３）。この図は広瀬天野家に伝わる補正雲陽軍実記全５巻（以下、『補正』とする）に添付されていた図を模写したものである。

『補正』は製作年、作者は不明で、広瀬藩士である森山家の蔵書であったものを天野家が譲り受けたものである。現在１・２巻を除いて所在不明となっており、月山城図も実見できなかった。

『松陽版』によると、『補正』の作者は月山城図について文中に、

「月山城の図絵なに人のつくれる所かは知らずふとあるかたより之を得てうつしおきぬ図のうち小池殿組やしきとあるをもてみれば尼子家没落後堀尾吉晴公居城し玉ひし時ゑかきつくれるものならんか小池それがしは堀尾公の老臣なりされども此時尼子没落後いまだ百年に及ばず残廓全きを得れば図中十に八九は証とするにたれり唯図のくはしから

ざるこそ遺憾なれ。」

と記述しており、城内の描写が詳細でないが、城下の一角に「小池殿組」という堀尾氏の老臣の名の付いた区画が描かれていることから、堀尾氏在城期の富田城と城下町を描いたものではないかと考察している。

この絵図は『補正』の作者が指摘している通り、山中御殿平付近の状況や千畳平石垣の形状など描写が本来の遺構の状況と異なる点があり、製作時期や描写の信憑性、また「小池」という人物の素性など今後も検討していく必要がある。その反面、月山山頂部三ノ丸の石垣と虎口の形態や、図中で本丸と記されている部分（現・二ノ丸付近か？）に大型の瓦葺建物があることなど、これまでの発掘調査によって明らかになった事象と符合する点もある。

絵図によると現在の広瀬絣センター付近には蓮池口という虎口が存在する。しかし、そこからの登城ルートは描かれておらず、また千畳平には向かって右端の御子守口側には門が描かれているが、左端の調査地点付近には門や虎口が描かれていない。

前述したようにこの図の精度に問題があるため断定はできないが、あえて作者の説を信用すれば、今回調査した通路状遺構につながるルートも描かれなかったのかもしれない。

注１．　舟木　聡2003「第Ⅴ章　まとめ」『史跡富田城跡環境整備事業報告書Ⅱ』広瀬町教育委員会

２．　九州近世陶磁学会2003『九州陶磁の編年』によると、Ｔ－２出土の唐津はＩ－１期（1580年代～1594年頃）もしくはＩ－２期（1594年頃～1610年代）とみられる。

３．　井原大之助編1911『雲陽軍実記』松陽新報社

図　　版

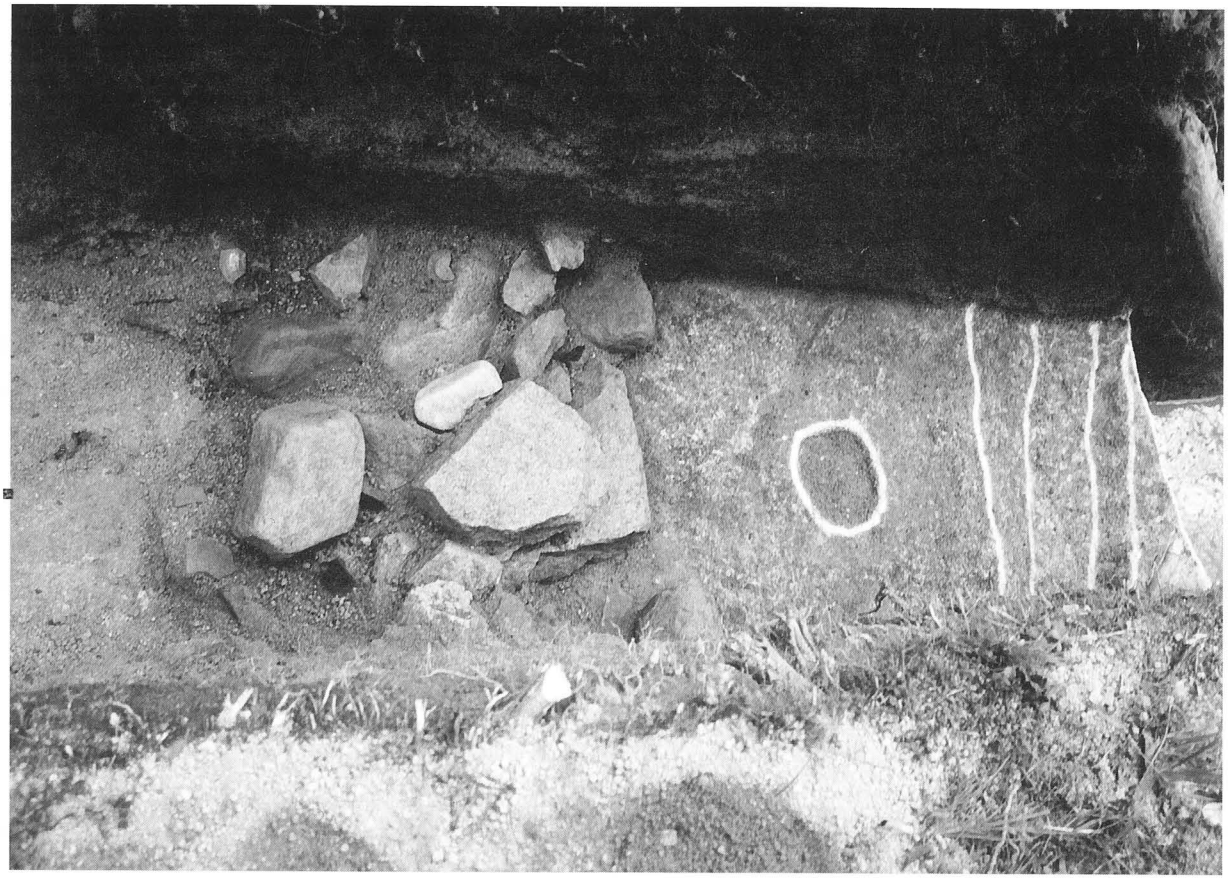
Ⅰ区　Ｔ－１（北東から）

Ⅰ区　Ｔ－１（南西から）

図版 2

Ⅰ区　Ｔ－２（北西から）

Ⅰ区　Ｔ－２（南東から）



Ⅰ区　T－2　石組遺構・P.2・SD02（東から）

Ⅰ区　T－2　石組遺構（北西から）

図版 4

Ⅰ区　T－2　石組遺構陶磁器・瓦出土状況（北東から）

Ⅰ区　T－3（北から）

Ⅰ区　T－3　SD01（北から）

Ⅰ区　T－4（北東から）

図版 6

Ⅰ区　SD01・P.6（南西から）

Ⅰ区　T－5（西から）

Ⅰ区　T－6（西から）

Ⅰ区　T－6　P.8（南から）

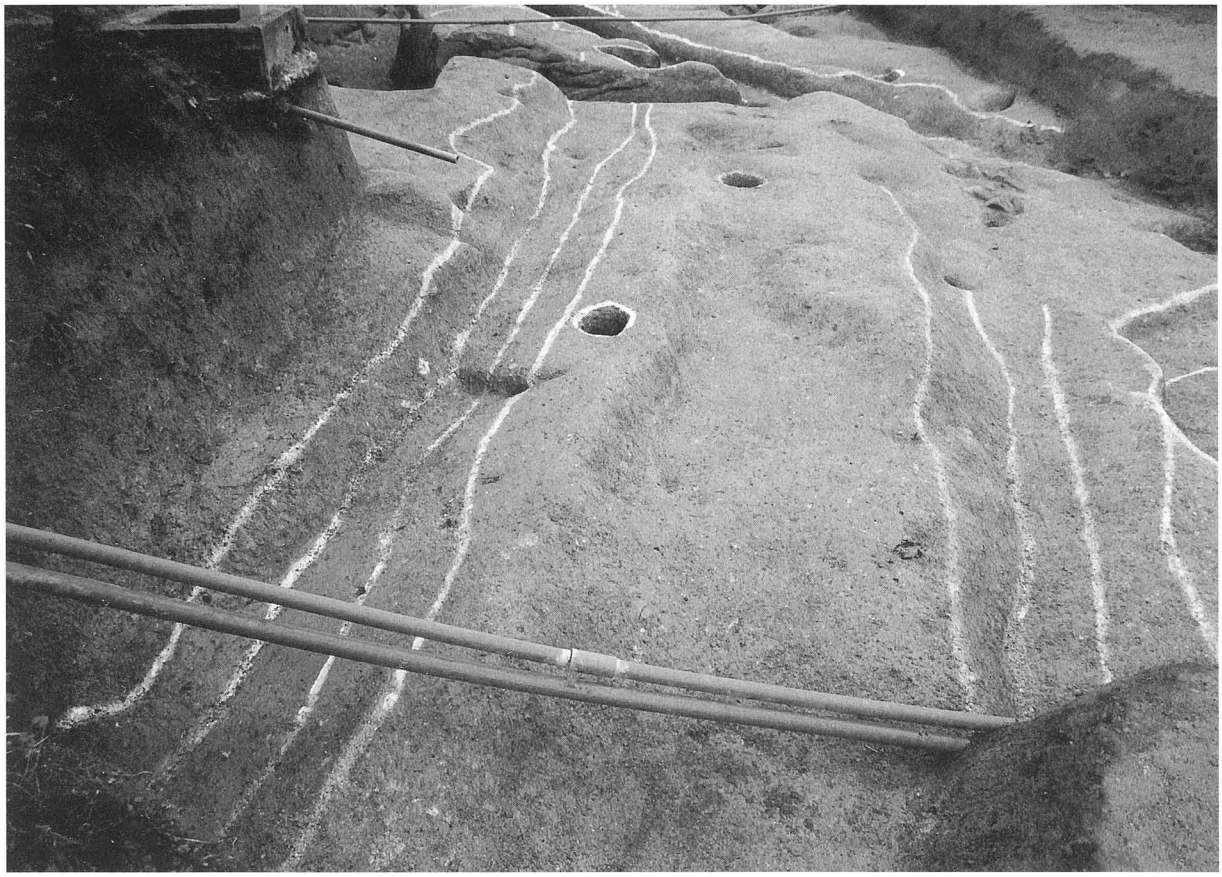
図版 8

Ⅱ区（西から）

Ⅱ区（東から）

Ⅱ区　サブトレンチ造成土断面（西から）

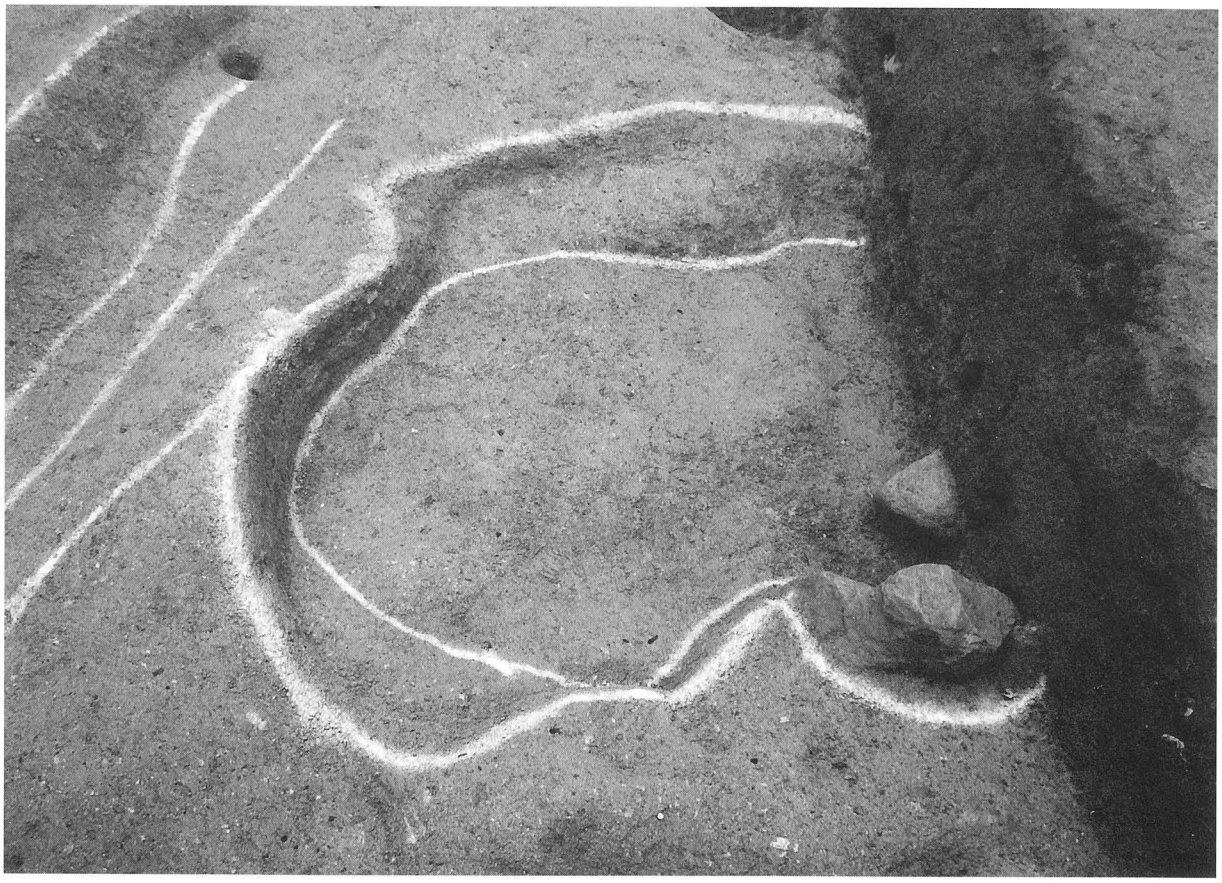
Ⅱ区　SD02北壁貼土状況（南東から）



Ⅱ区　通路状遺構（南東から）

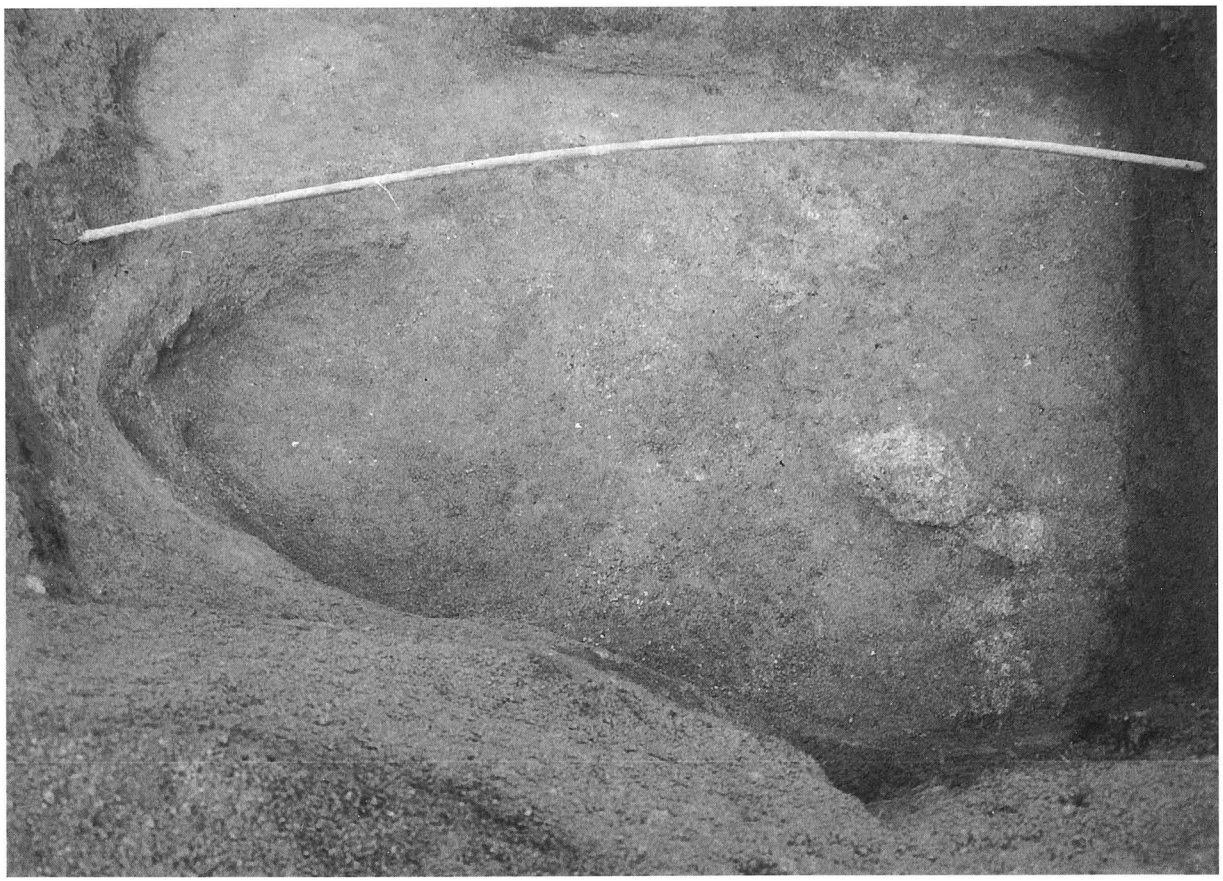
Ⅱ区　SK01（東から）

Ⅱ区　SK01　遺物出土状況（東から）

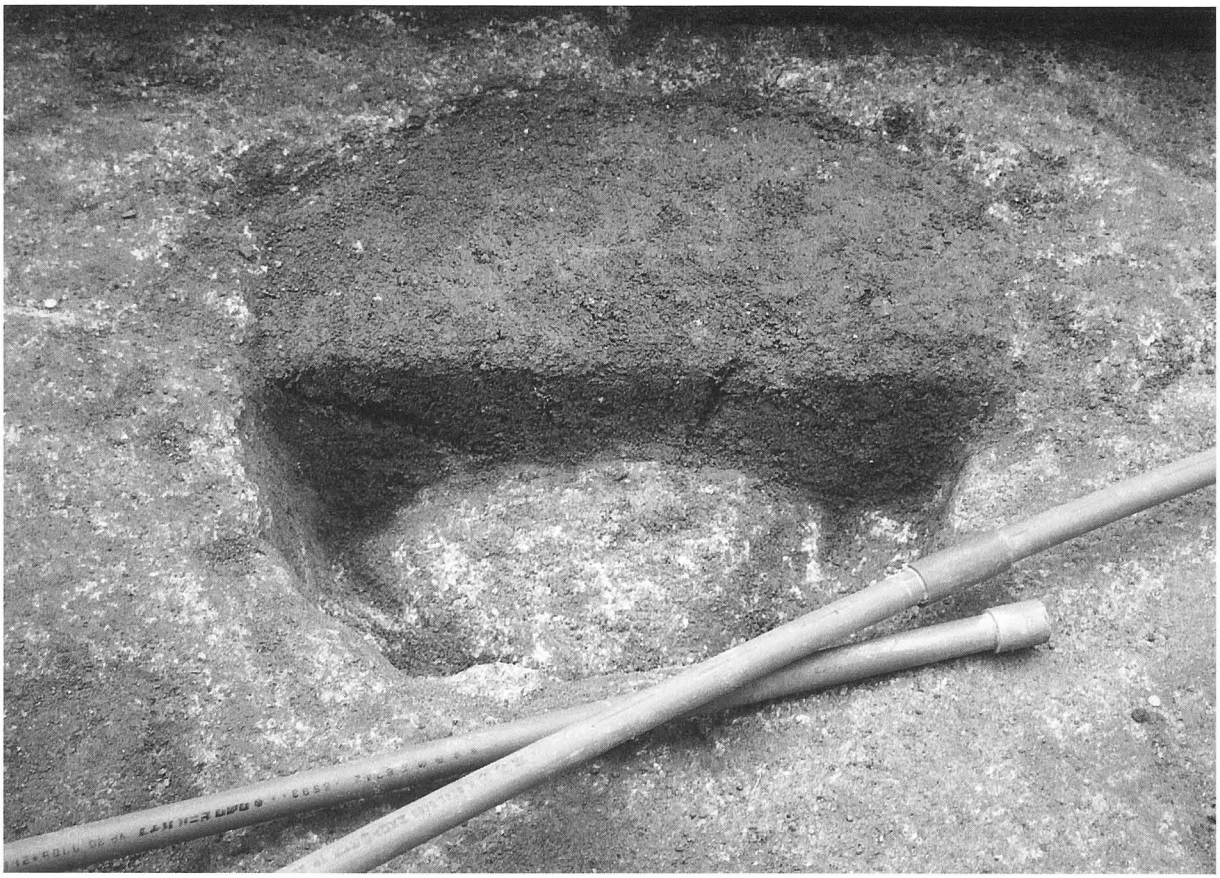


Ⅱ区　SK01　完掘状況（東から）

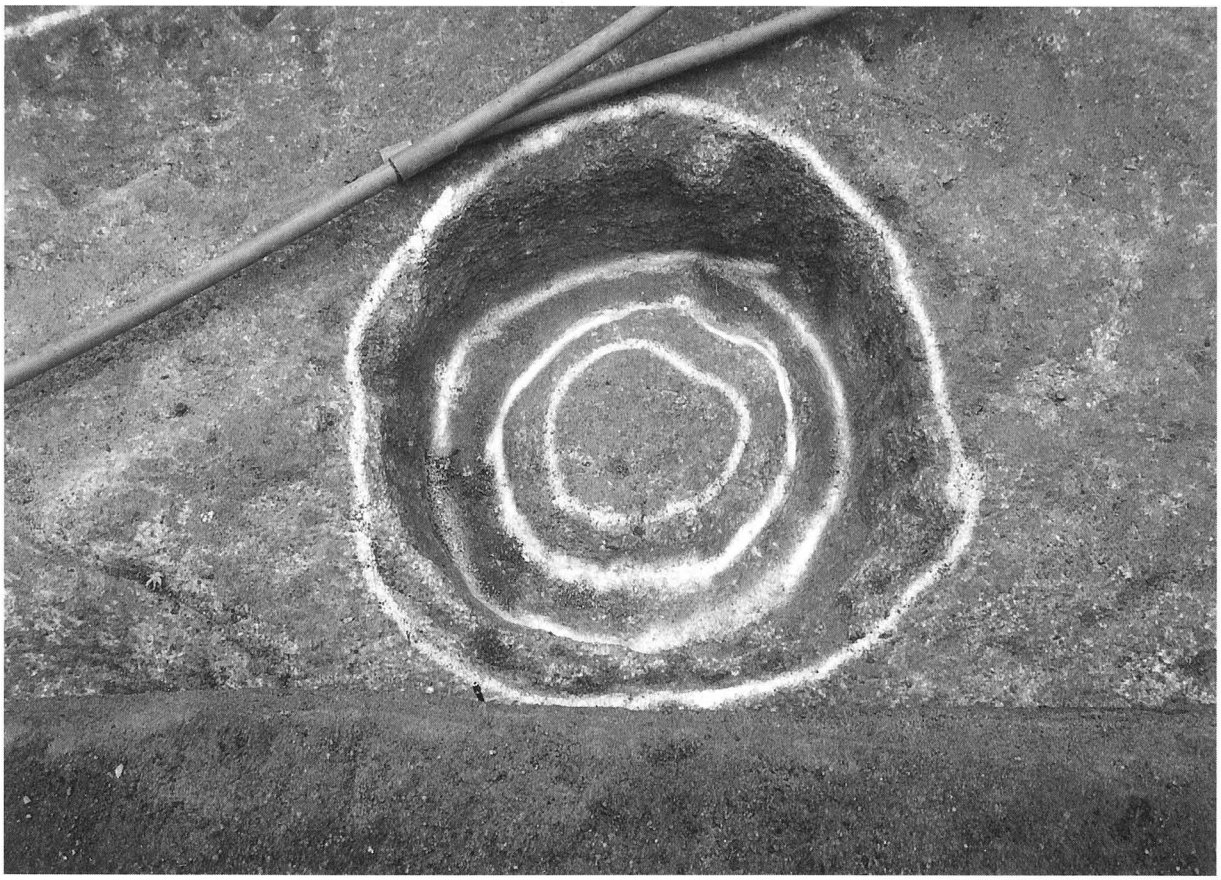
Ⅱ区　SD03（南西から）



Ⅱ区　SK02（北から）

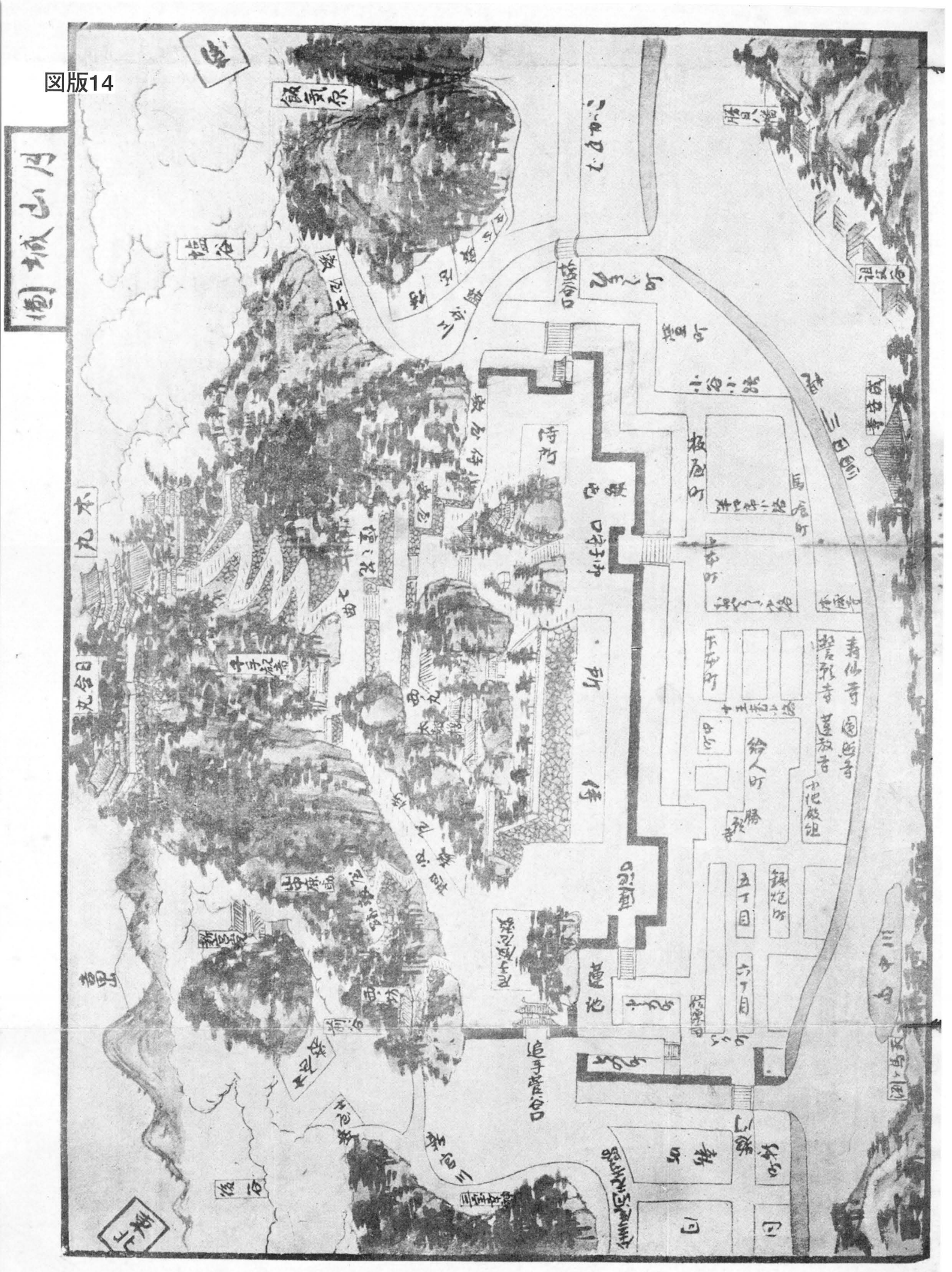


Ⅱ区　SK04　土層断面（南から）

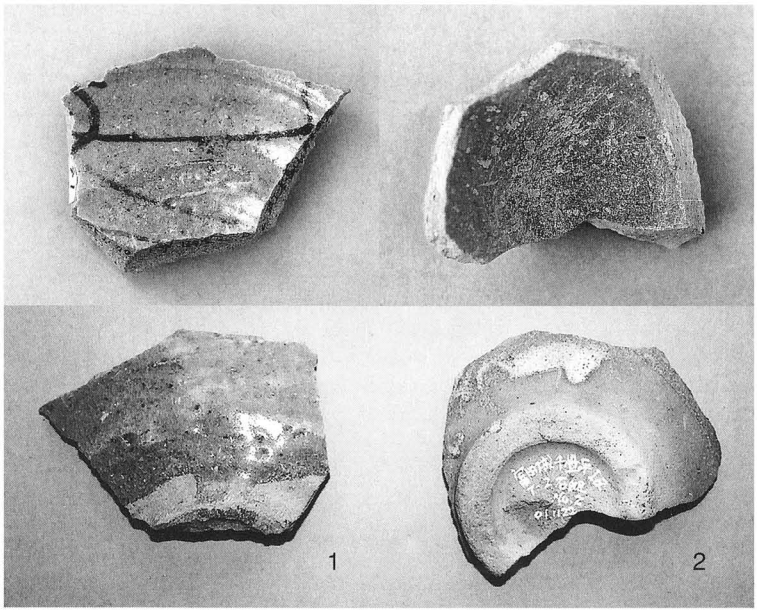


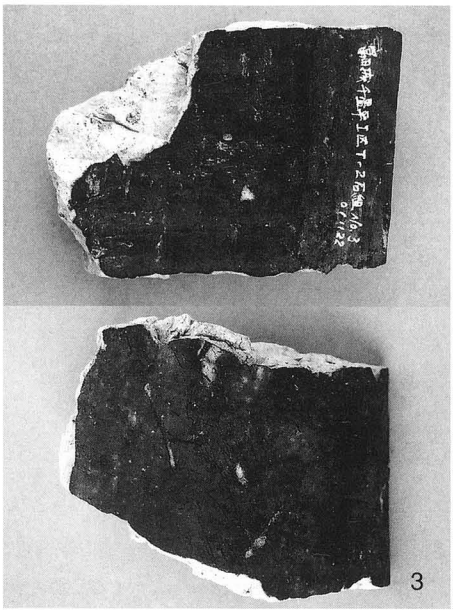
Ⅱ区　SK04　完掘状況（北から）

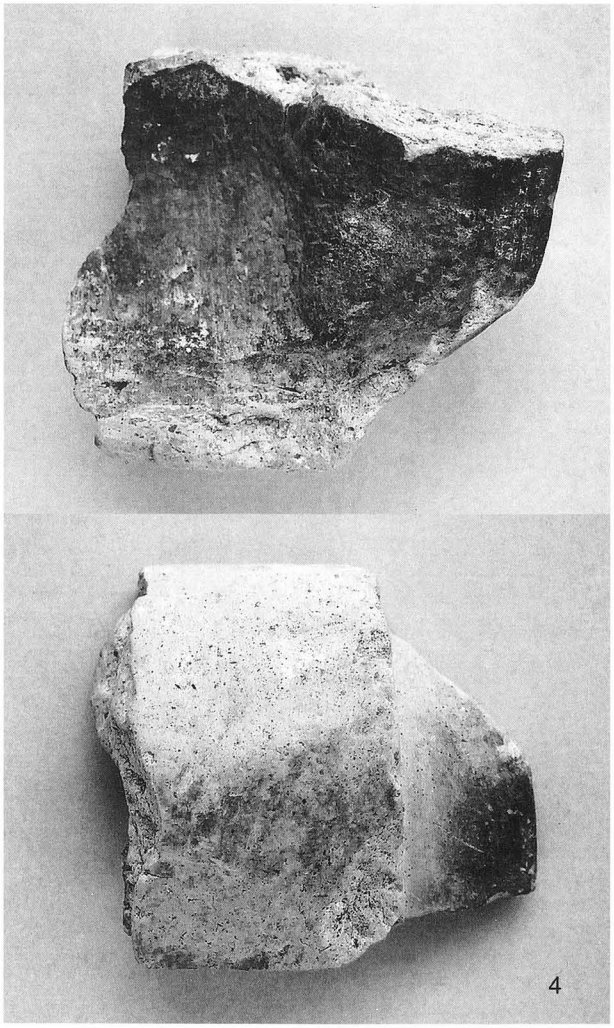
図版14

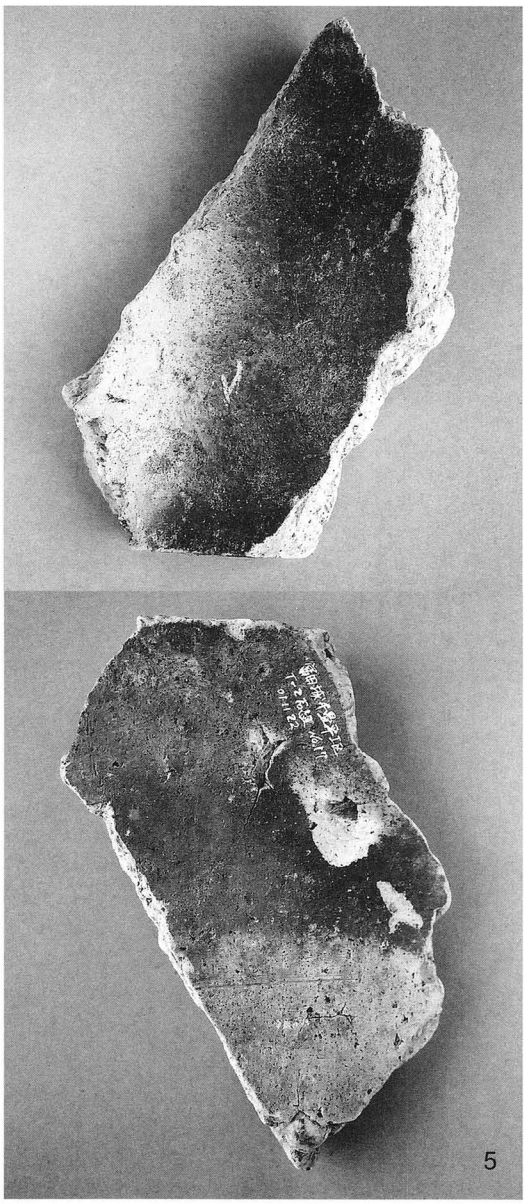


松陽新報社版　雲陽軍実記　月山城図

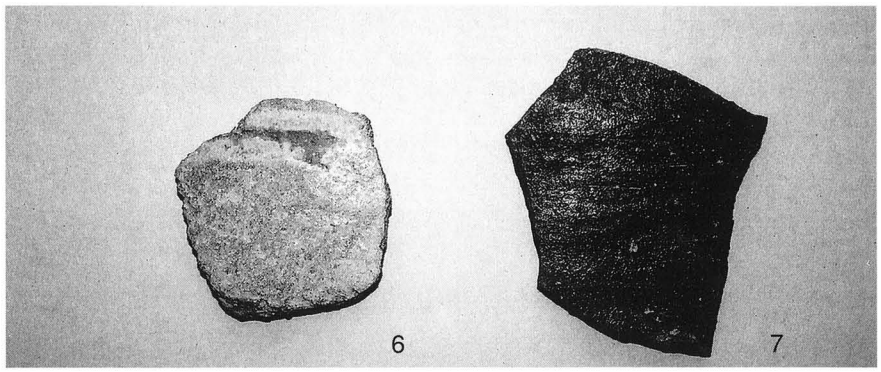


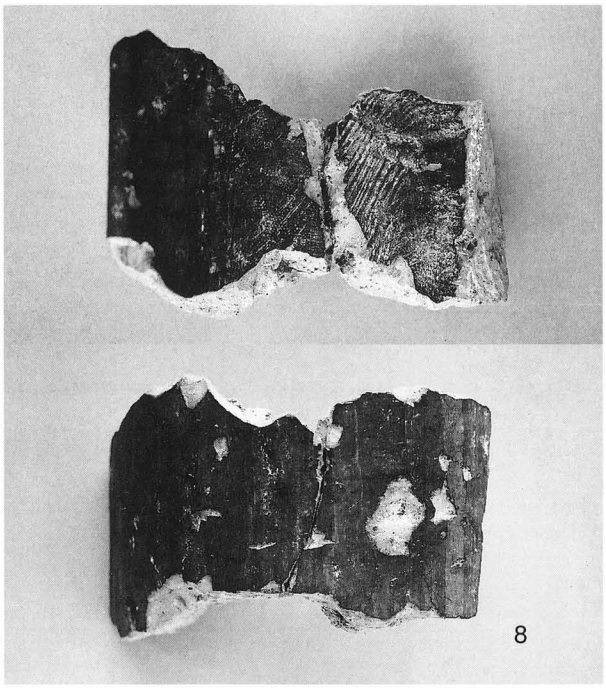


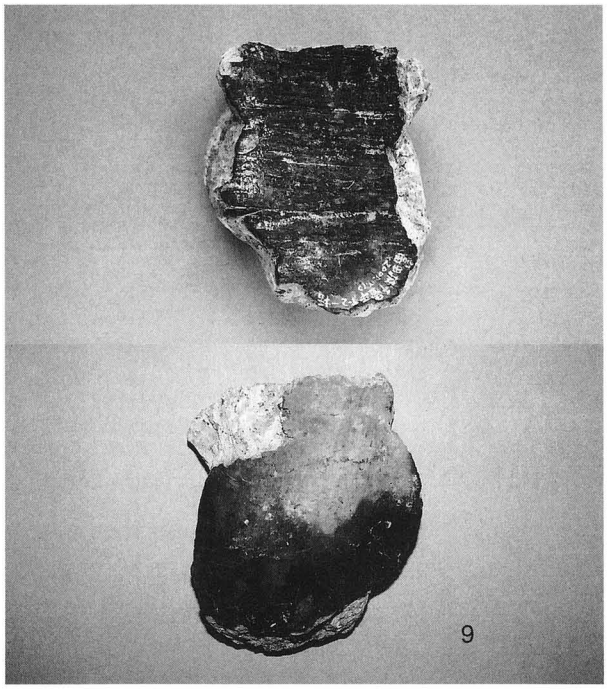


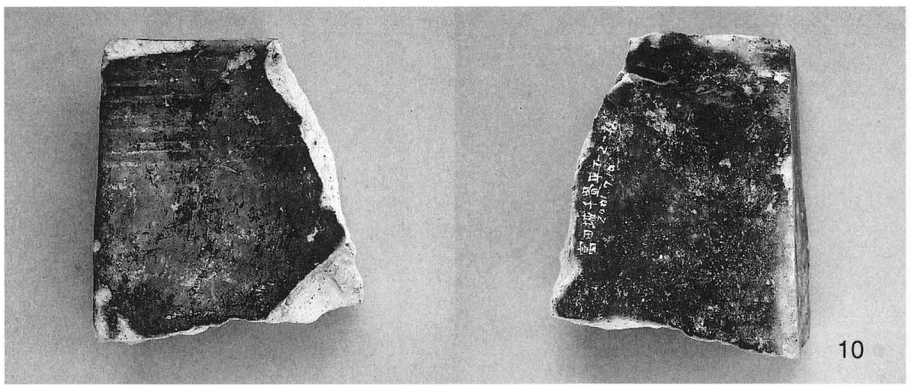


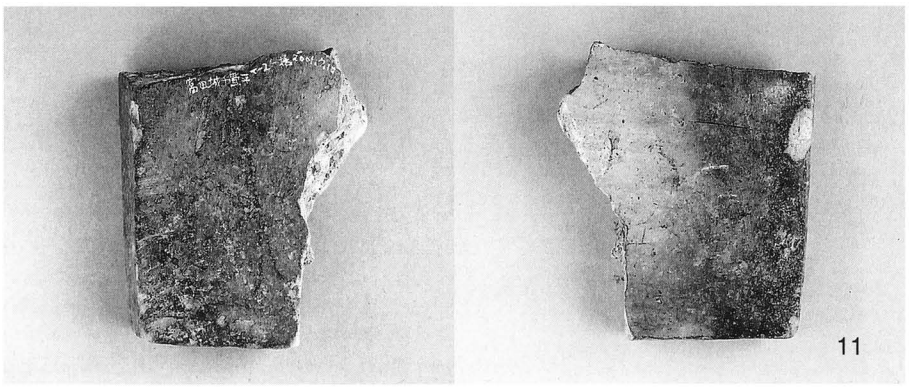
Ⅰ区　Ｔ－２　石組遺構出土遺物



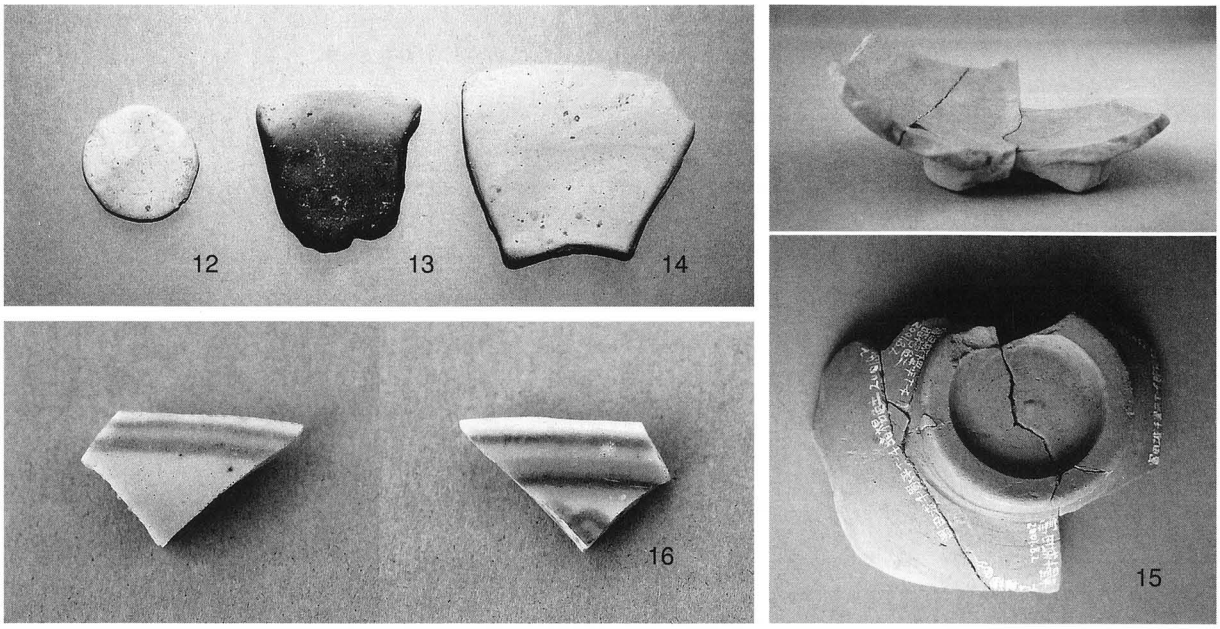




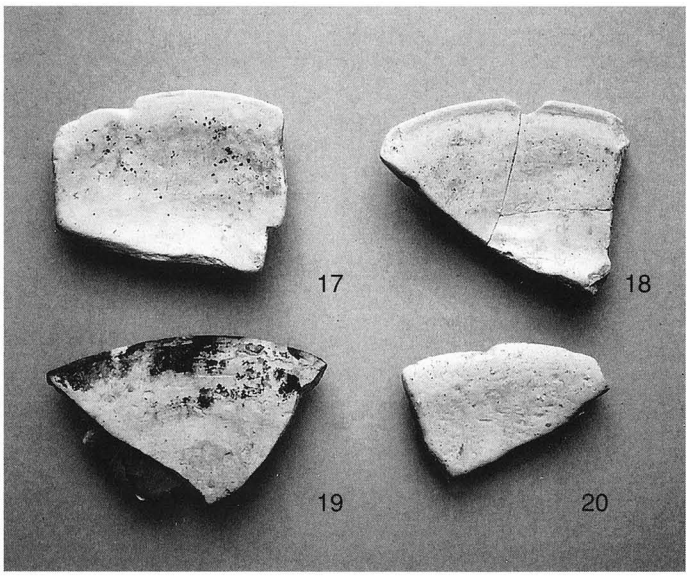




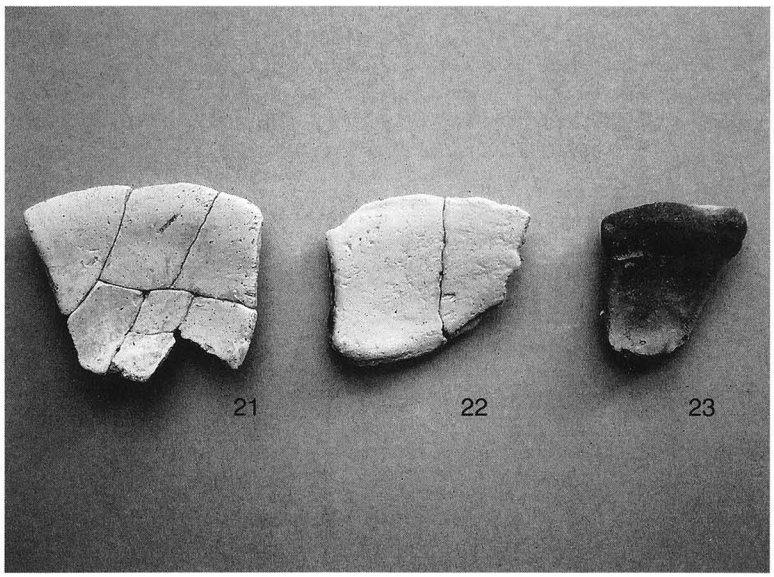
Ⅰ区　T－2　出土遺物



Ⅰ区　SD01出土遺物（12～14）、Ⅰ区　出土遺物（15、16）

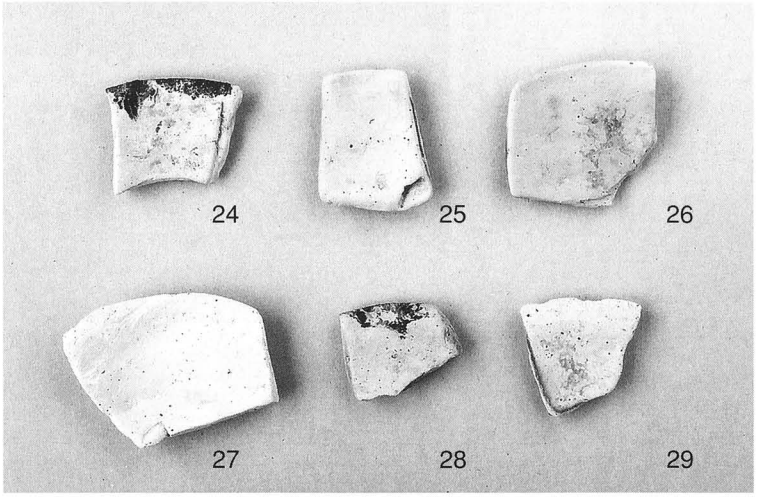


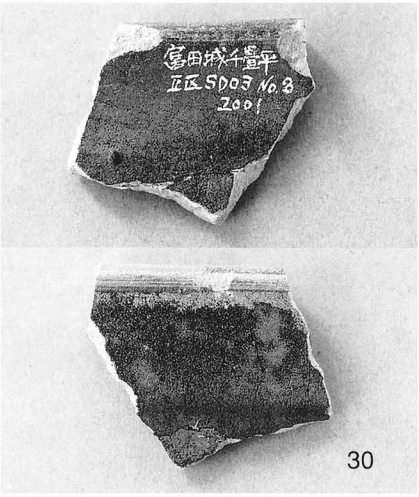
Ⅱ区　遺構面出土遺物

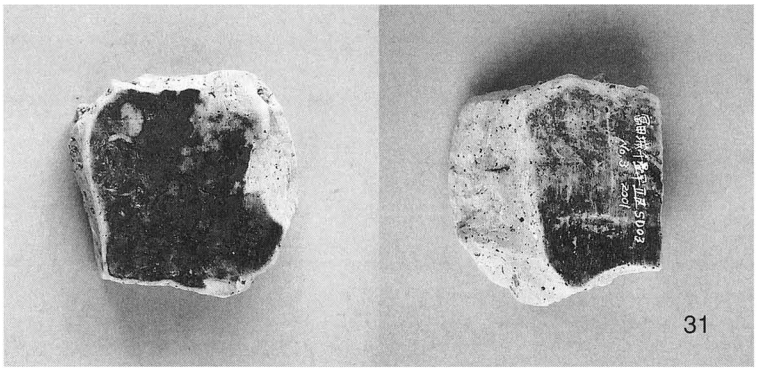


Ⅱ区　通路状遺構出土遺物

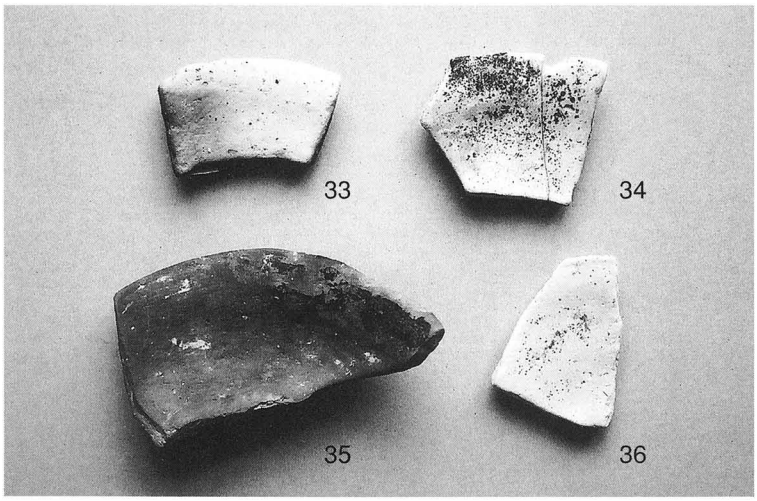
図版18

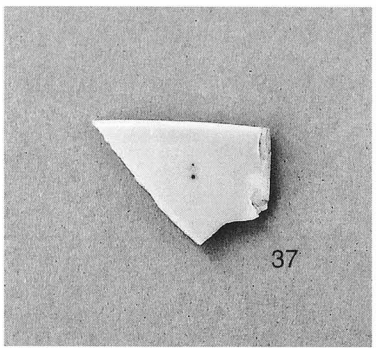


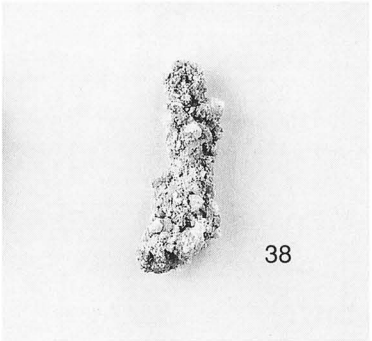


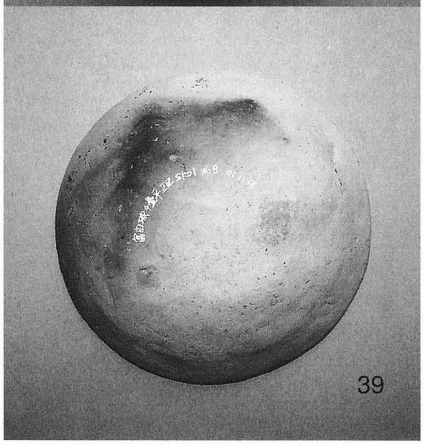


Ⅱ区　SD03　出土遺物

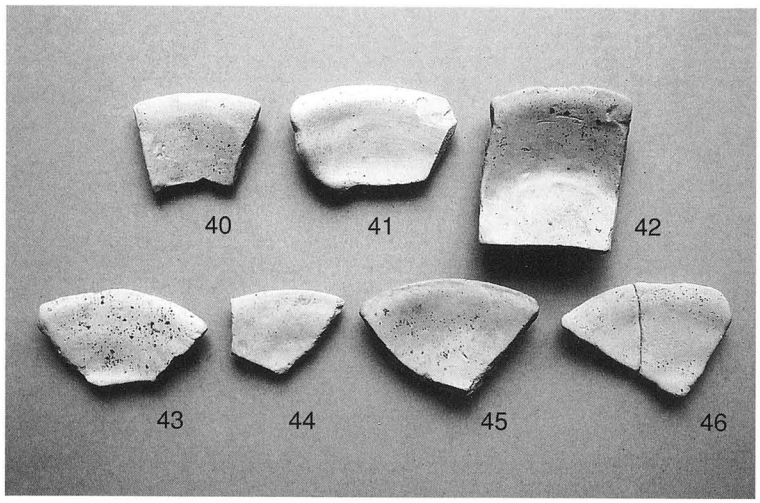


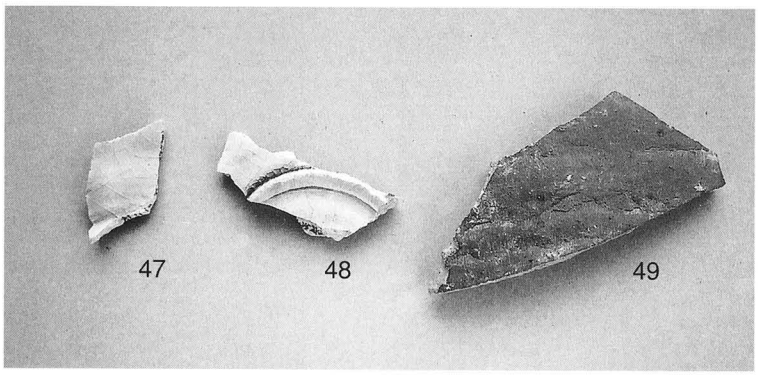


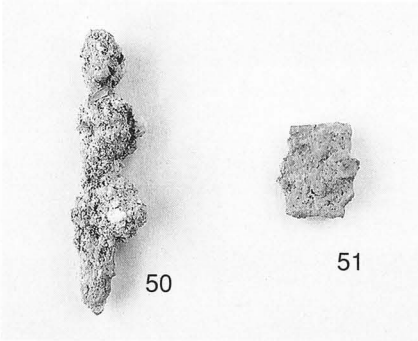




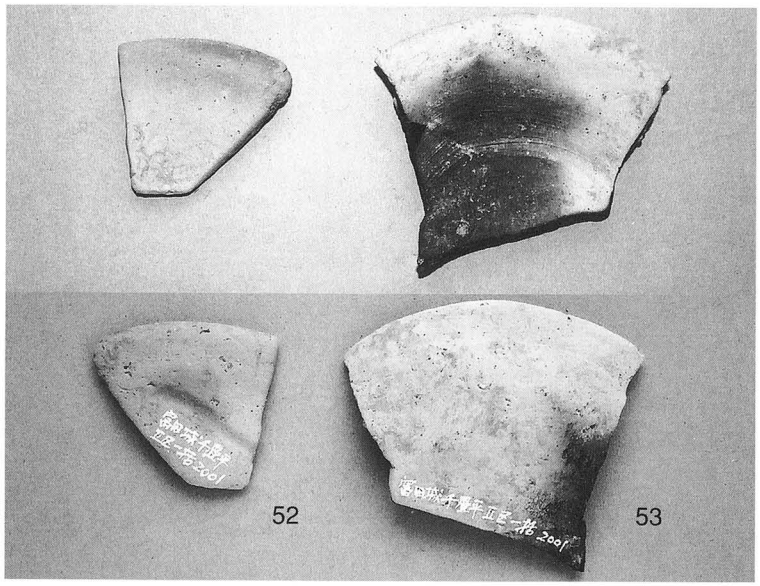
Ⅱ区　SK01　出土遺物

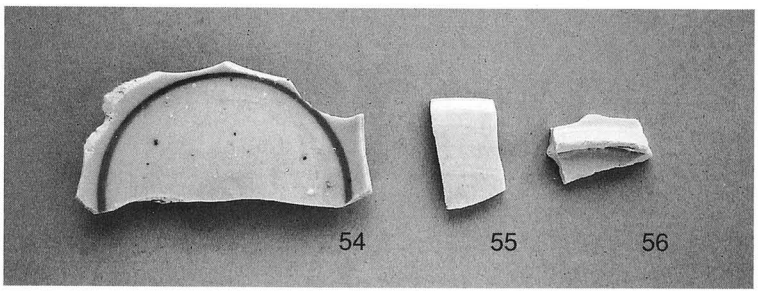


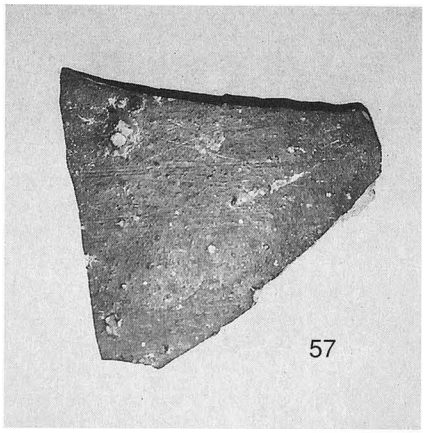




Ⅱ区　遺構面造成土内出土遺物

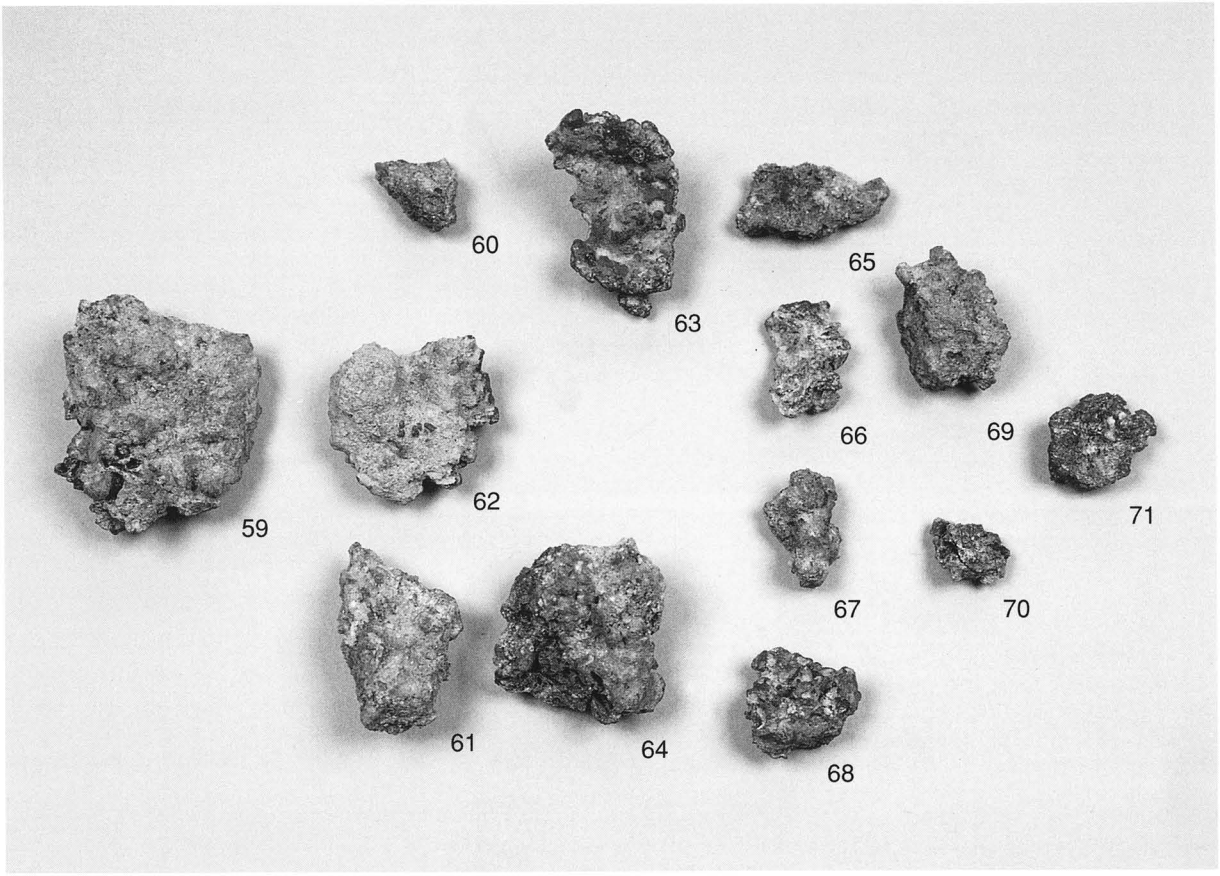


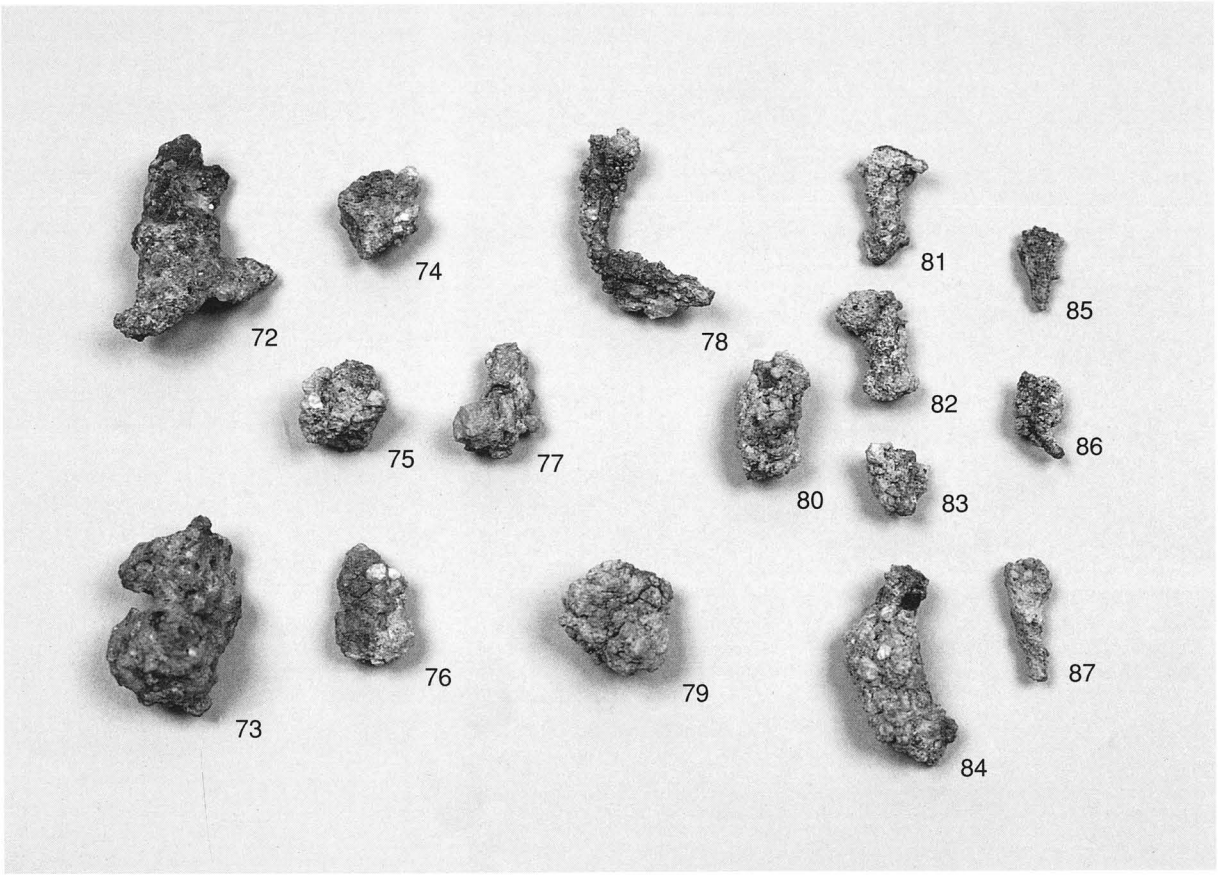




Ⅱ区　出土遺物

図版20





千畳平地区　製鉄関連遺物

日向丸城砦跡群

第Ⅲ章　日向丸城砦跡群

第１節　調査に至る経緯

平成11年に広瀬町塩谷地区において林道建設が計画され、その計画ルート内において埋蔵文化財の有無を確認するため分布調査を行った。その結果、付近には周知の遺跡である日向丸城砦跡群が存在し、その内２つの曲輪がルート上にあることが判明した。

そこで、広瀬町教育委員会では、事業主体者である広瀬町森林組合と協議したところ、ルートの変更は困難であるとの結論に達し、発掘調査を行って記録保存に留めることになった。

第２節　発掘調査の概要

当初、予定地内には２段の曲輪が存在するように見受けられた。林道建設は上段の曲輪（以下、曲輪１とする。）全体と下段の曲輪（以下、曲輪２とする。）の付け根部分が対象になっており、発掘調査もこの部分を対象に行った。

また、曲輪２の構造を明らかにするために、曲輪中央部を縦断するサブトレンチを設けて調査を行った。

なお、調査開始時には曲輪１の西端まで重機による掘削が進んでおり、急な崖になっていたため、この部分については安全上の理由から満足な調査が行うことが出来なかった。

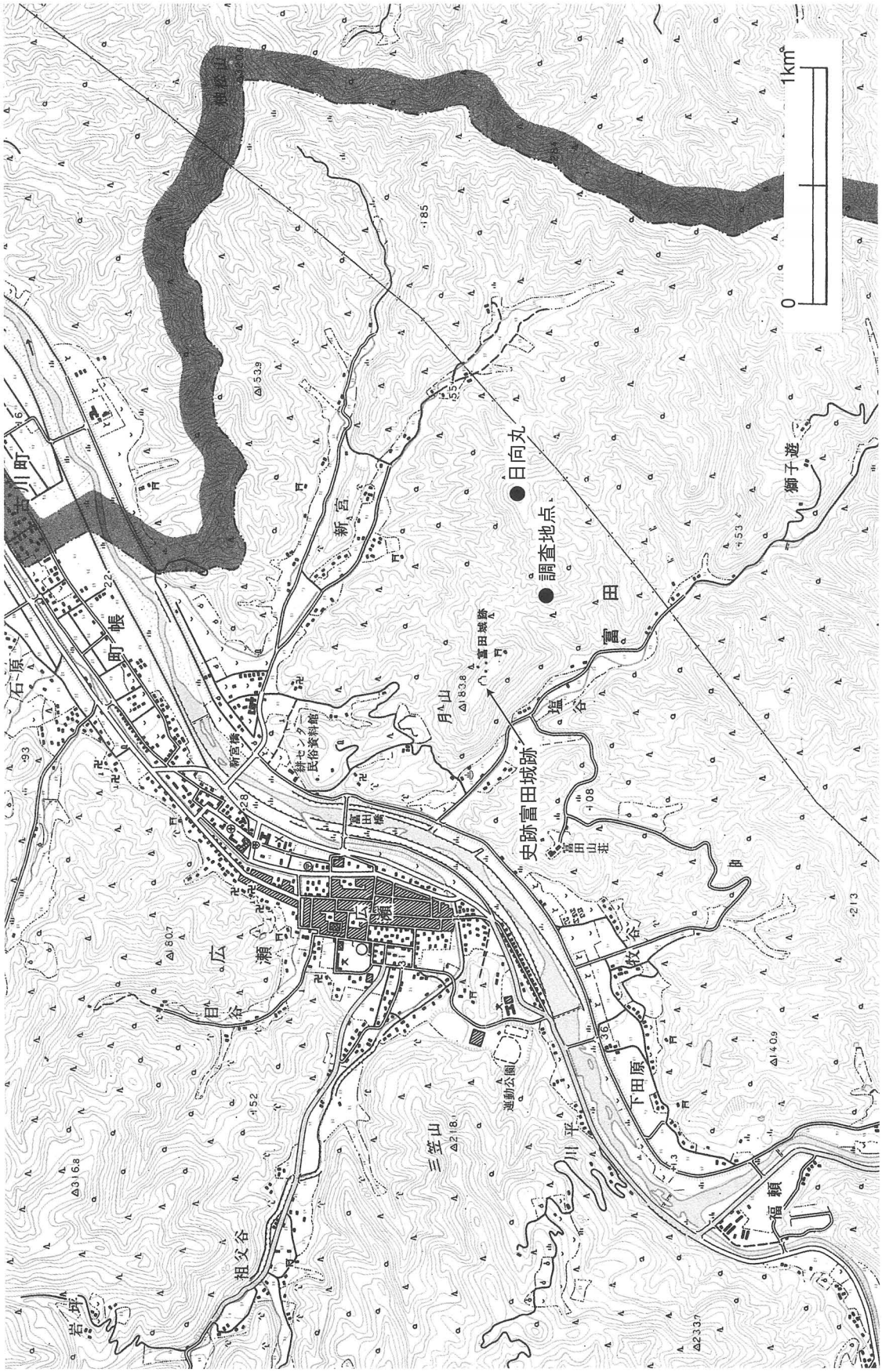
第３節　検出遺構

１．曲輪１

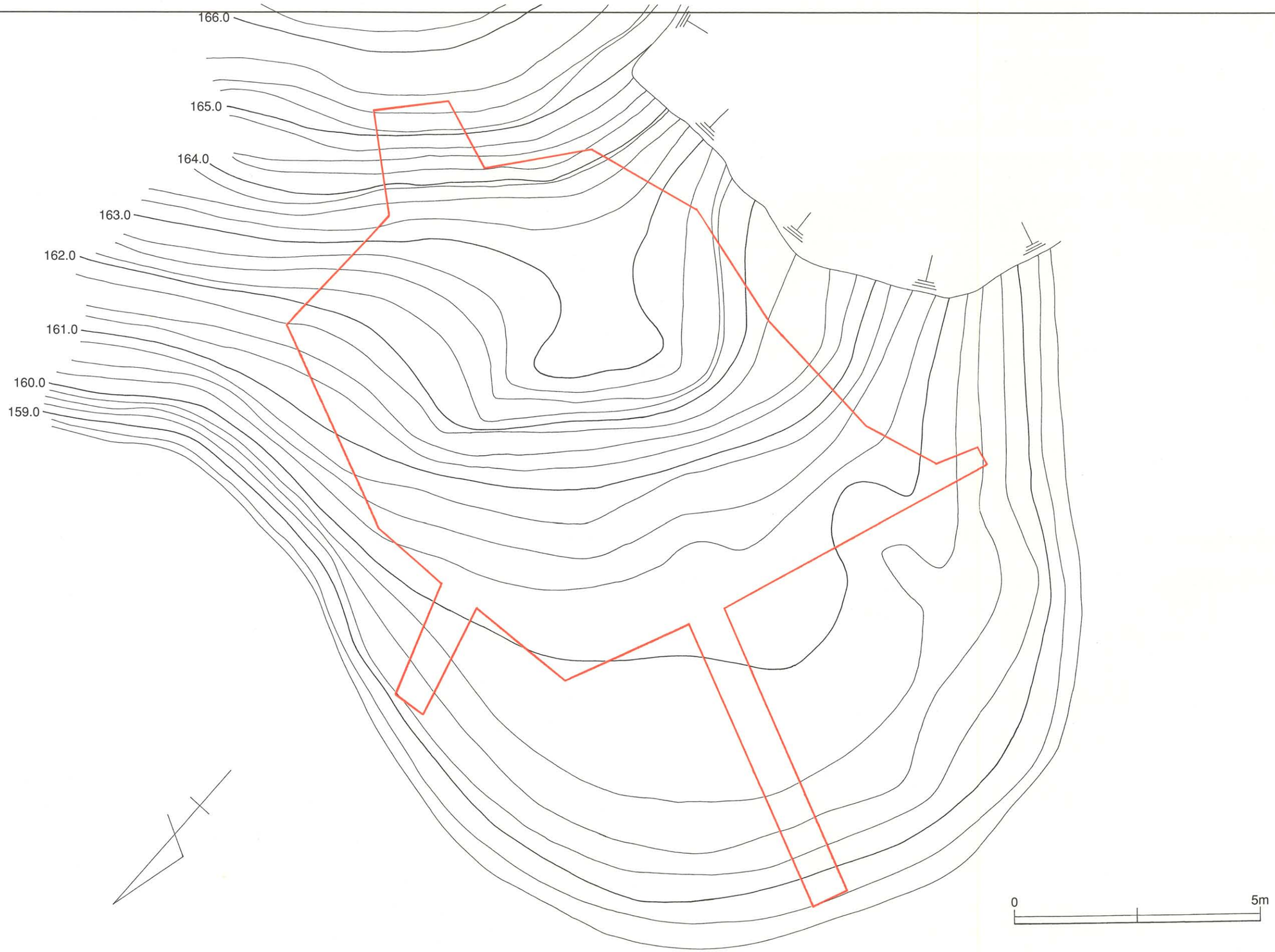
発掘前の状況では、狭い曲輪の中央を浅い窪地が横断しており、後世に山道が設けられたものと思われた。調査の結果、溝状遺構（ＳＤ０１）であることを確認した。南西端部が未検出のため全容は不明であるが、検出部の長さ６ｍ、幅約1.5ｍ、深さ約50㎝で、風化花崗岩質の地山に掘り込まれており、断面形は逆台形状を呈する。曲輪中央付近を頂点として東西方向に傾斜し北東部は曲輪の肩部にぶつかって終わっている。遺構内には地山の自然風化土である橙褐色土が堆積していた。内部から遺物は出土しなかった。

２．曲輪２

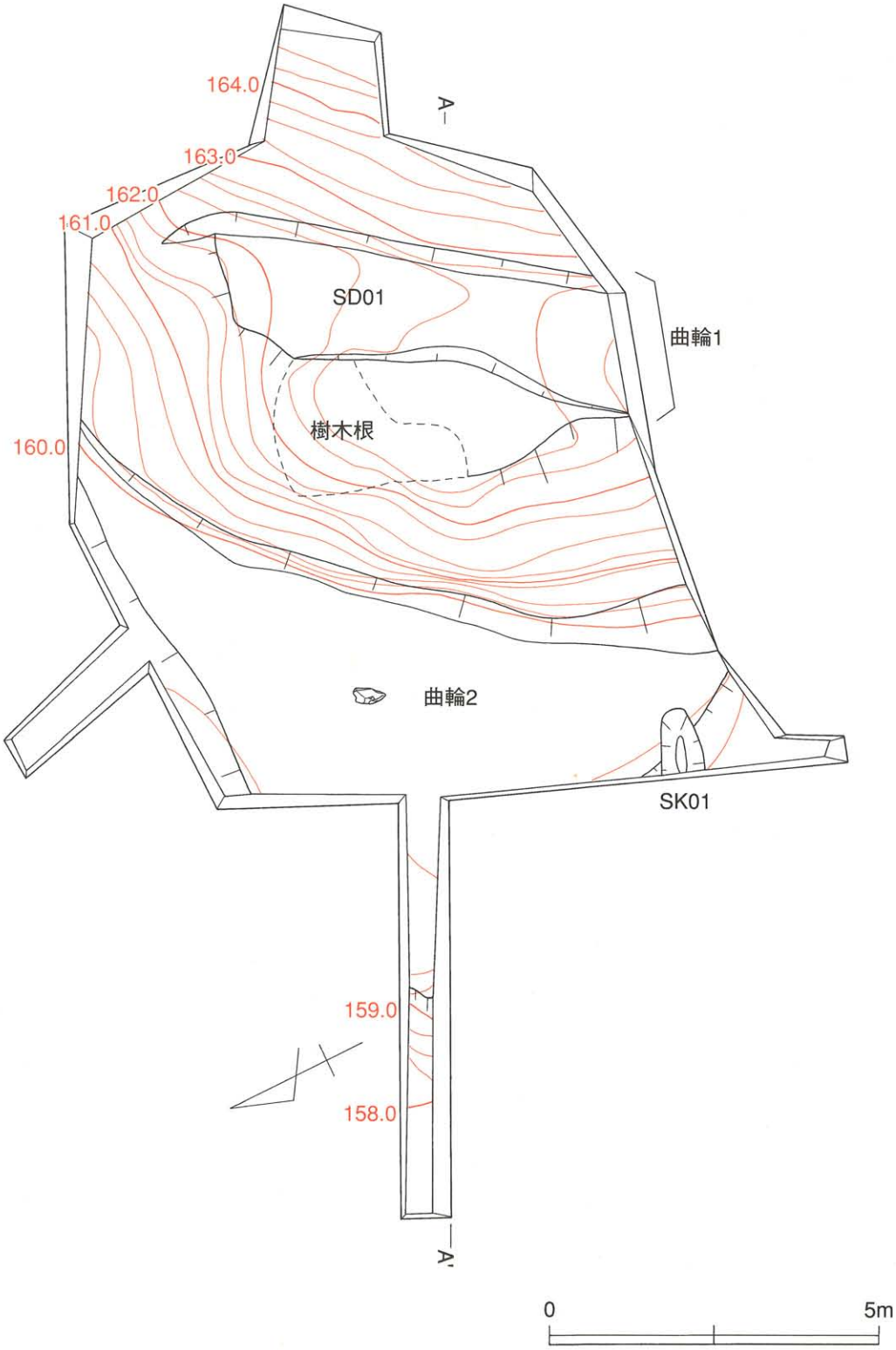
曲輪１の北側に一段下がって隣接する曲輪である。平坦面の規模は完掘していないため全容は不明であるが、幅は北西―南東が約６ｍ、北東―南西が約9.5ｍ、曲輪１との比高差は約３ｍを測る。曲輪１から斜面を約３ｍ下がった所から削平して舌状の平坦面を造り、北端部には造成時の廃土を盛ることで面積を若干広げている。曲輪西端部の切岸には造成


●日向丸
●調査地点
史跡富田城跡
富田
新宮
獅子遊
月山
塩谷
広瀬
町帳
目谷
担父谷
三笠山
川平
下田原
牧谷
福頼
石原
0
1km

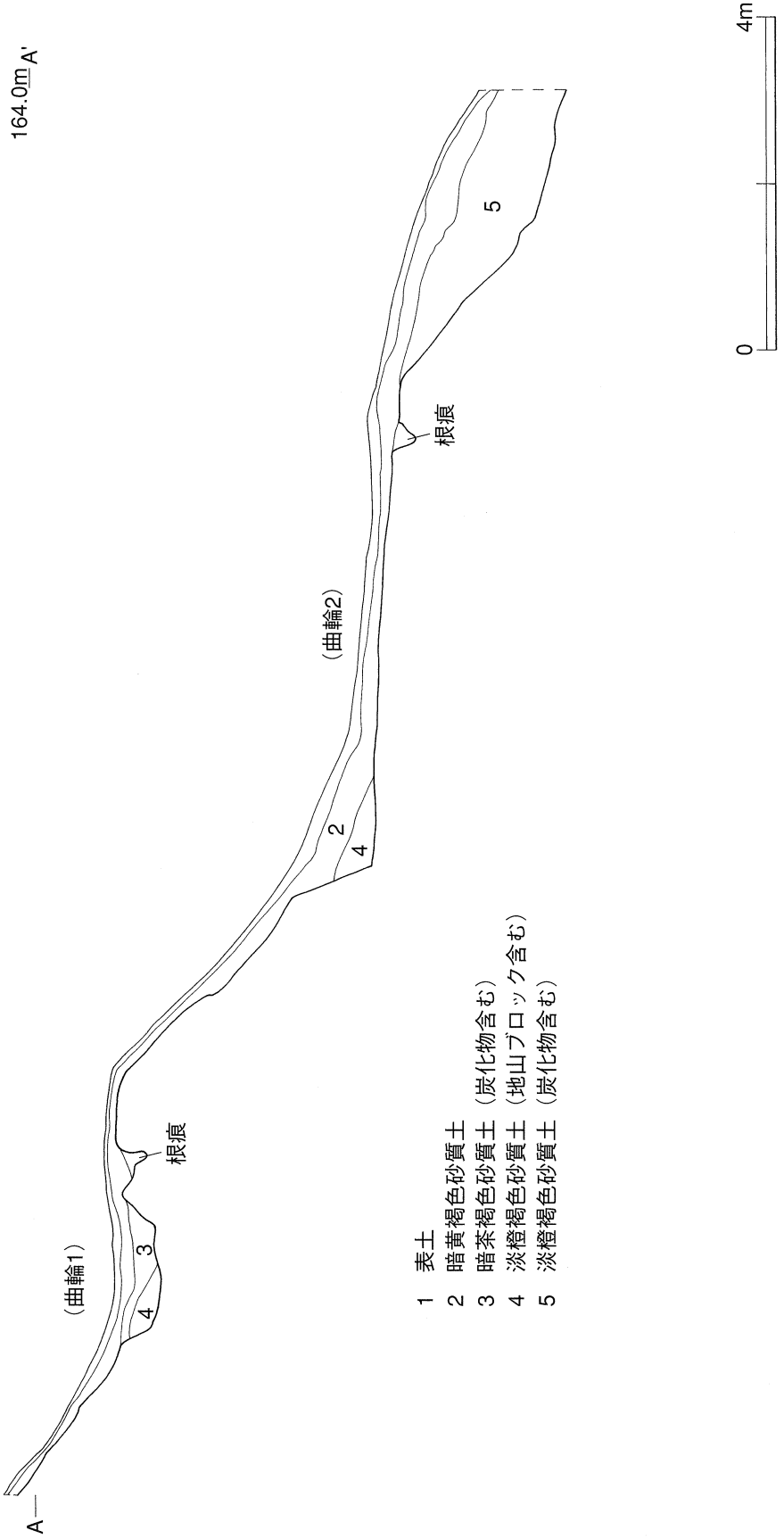
第21図　調査地位置図



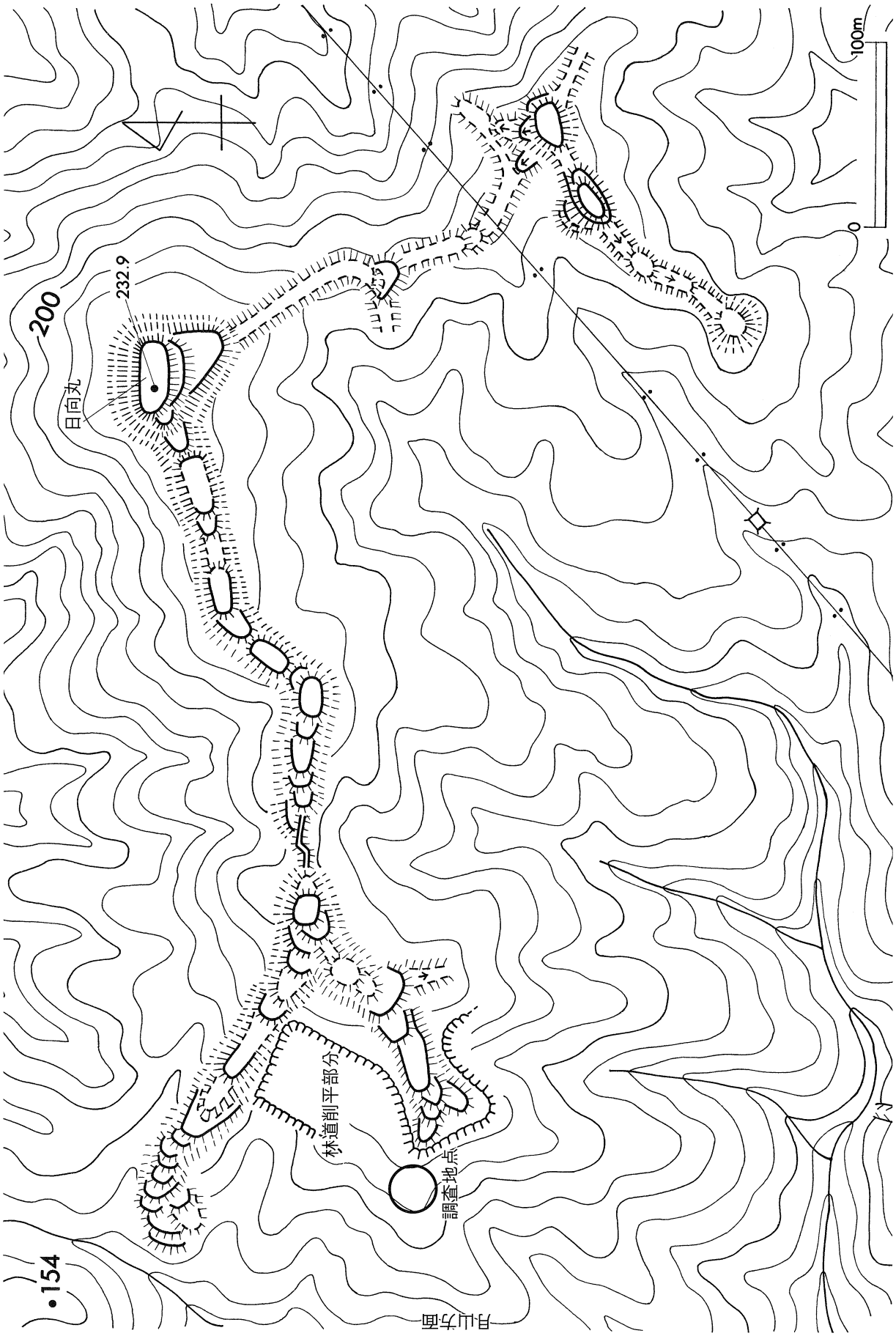
第22図　日向丸城砦跡群調査前地形測量図（S＝1/80）



第23図　日向丸城跡遺構平面図（S＝1/100）



第24図　日向丸城跡土層断面図（S＝1/80）



第25図　日向丸城砦跡群縄張図（S＝1/3000）　今岡　稔　原図作成

時のものとみられる工具痕が明瞭に残っていた。

調査区西端では曲輪２の縁辺部に土壙（ＳＫ０１）が掘られていた。この土壙は調査区外に伸びているため全容は不明であるが、検出部分の規模では長辺約１ｍ、短辺約70cm、深さ約１ｍを測る。内部には底部付近に地山風化土である真砂土が若干堆積していた他はほとんどが表土によって埋没していた。土壙の時期や性格は不明であるが、その埋没状況から見て後世に掘られた遺構かもしれない。

この曲輪内から遺物は出土しなかった。

第４節　まとめ

日向丸城砦跡群は、その存在は古くから認知されてきたが、具体的な調査・研究が行われたことはなかった。しかし近年、中世城郭研究会会員である寺井毅氏（注１）と今岡稔氏（注２）によって、中心部から調査地点付近までの踏査及び縄張図の作成が行われ、城の性格について考察が行われている。それによると、現在みられる縄張は、富田城方向に重点をおいて曲輪が配置されていることから、富田城を攻略するための向城として築城もしくは改修された可能性が指摘されている。

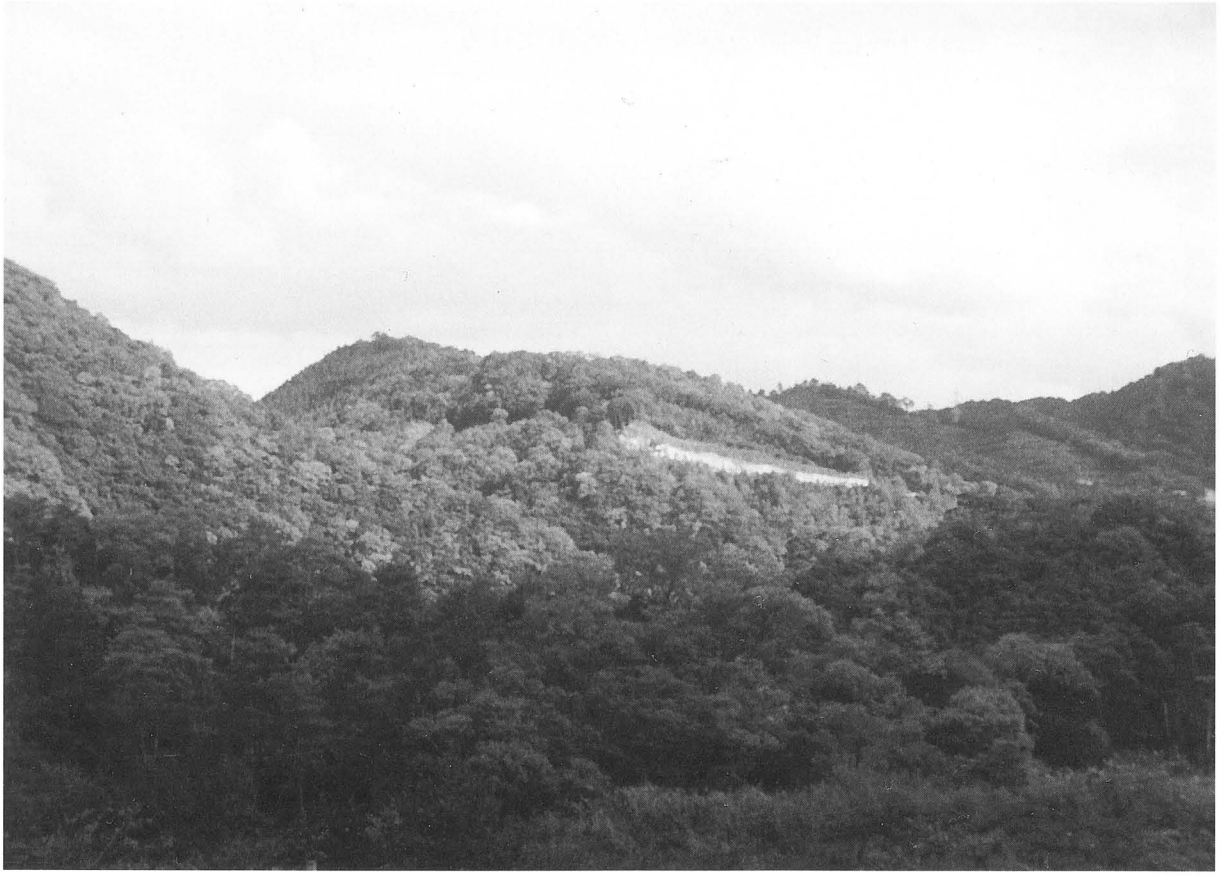
今回の調査では、日向丸城砦跡群の城郭構造の一端を明らかにすることができた。しかし、調査区域は城のごく一部分でしかなく、また遺構の時期や性格の手掛かりとなる出土遺物もなかったため、具体的な事象については今後に多くの課題が残る。とはいえ、今まで謎であった富田城に関係すると考えられる城砦の構造の一端を明らかにできたことは、一応の成果をあげることができたと言えよう。

注１．　寺井　毅2000『尼子氏最末期の富田城について —安来市吉田を中心に—』中世城郭研究第14号　中世城郭研究会

２．　今岡　稔2001『月山富田城日向丸踏査記』季刊文化財第97号　島根県文化財愛護協会

図　　版

富田城跡（左）と日向丸城跡（右）遠景（西から）



日向丸城跡遠景（西から）

図版 2

曲輪 1 （南東から）

曲輪 1　SD01　土層断面（北東から）

曲輪 1　SD01　完掘状況（北東から）

曲輪 1　SD01　完掘状況（南西から）

図版 4

曲輪 2（北西から）

SK01及び曲輪 2　西端の工具痕（南西から）

曲輪 2　切岸部土層断面（北東から）

曲輪 2　先端切岸及び盛土（北西から）

史跡富田城跡発掘調査報告書

（千畳平地区）

附．日向丸城砦跡群発掘調査報告

2004年３月

編集・発行　広瀬町教育委員会
島根県能義郡広瀬町広瀬811
印刷　㈲太　陽　平　版
島根県安来市安来町765―5